

六号室

アントン・チェホフ Anton Chekhov

瀬沼夏葉訳

青空文庫

(一)

町立病院の庭の内、牛蒡、蓐草、野麻などの簇り茂つ
 ちようりつびよういん にわうち ごぼう いらぐさ のあさ むらがしげ
 てる辺に、小やかなる別室の一棟がある。屋根のブリキ板は錆
 あたり ささき べっしつ やね いたさ
 びて、烟突は半破れ、玄関の階段は紛聖が剥がれて、朽
 えんとつ なかばわ げんかん かいだん しつくい は
 ちて、雑草さえのびのびと。正面は本院に向い、後方
 ざっそう しょうめん ほんいん むか こうほう
 ひろびろ のらののぞ くぎ た ねずみいろ へい とりまわ
 は茫広とした野良に臨んで、釘を立てた鼠色の塀が取繞
 せんとつ せんたん うえ む くぎ へい さてはまた
 されてる。この尖端を上に向けている釘と、塀、さてはまた
 べっしつ ロシア
 この別室、こは露西亞において、ただ病院と、監獄とに
 み はかな あわれ さび たてもの
 のみ見る、儂き、哀な、寂しい建物。

尋草いらぐさに掩おおわれたる細道ほそみちを行ゆけば直すぐ別室べっしつの入口いりぐちの戸とで、
 戸とを開ひらけば玄関げんかんである。壁際かべぎわや、暖炉だんろの周辺まわりには病院びやういんの
 さまざまの雑具がらくた、古寐台ふるねだい、汚よごれた病院服びやういんふく、ぼろぼろの股
 ボンボンした、青あおい縞しまの洗あらいざら、浚あらいしのシャツ、破やぶれた古靴ふるぐつと云いつたよ
 引下ひきさ、うな物ものが、ごたくさと、山やまのように積つみ重かさねられて、悪あく臭しゆうを
 放はなつてゐる。

この積つみ上げられたる雑具がらくたの上うえに、いつでも烟管きせるを嚙くわえて寐ね込そ
 っているのは、年としを取とつた兵隊上へいたいあがりの、色いろの褪さめた徽章きしょうの附つ
 いてる軍服ぐんぷくを始ふだん終き着きているニキタと云いう小使こづかい。眼めに掩おおい被かぶさ
 っている眉まゆは山羊やぎのようあかで、赤あかい鼻はなの仏頂面ぶつちようづら、背せは高たかくはない
 が瘡やせて節塊ふしくれだ立たつて、どこにかこう一癖くせありおとこそうかれな男おとこ。彼かれは極きわ

めて頑かたくなで、何なによりも秩序ちつじよと云いうことを大切たいせつに思おもつていて、自じ

 分の職務ぶんしよくむを遣やり終おほせるには、何なんでもその鉄拳てつけんを以もつて、相手あいての

 顔かおだろうが、頭あたまだろうが、胸むねだろうが、手て当あたり放ほう題だいに殴なぐ打うらな

 ければならぬものと信しんじている、所謂いわゆる思慮しりよの廻まわらぬ人にんげん間ま。

 玄関げんかんの先さきはこの別室べつしつ全ぜん体たいを占しめている広ひろい間ま、これが六

 号室ごうしつである。浅黄あさぎ色のペンキ塗ぬりの壁かべは汚よごれて、天てん井じは燻くすぶ

 つている。冬ふゆに暖炉だんろが烟けぶつて炭氣たんきに罩こめられたものと見みえる。窓まど

 は内側うちがわから見み悪にくく鉄格子てつごうしを嵌はめられ、床ゆかは白しろちやけて、そそ

 くれ立だつている。漬つけた玉菜たまなや、ランプの燻いぶりや、南なん京きん虫むしや、ア

 ンモニヤの臭においが混こんじて、入はいつた初はじめの一ぶんじ分ぶん時は、動どう物ぶつ園えんにでも

 行いつたかのような感かん覚かくを惹ひき起おこすので。

室内しつないには螺旋ねじで床ゆかに止められた寢台ねだいが数すうき脚やく。その上うえには
 青いあお病院服びょういんふくを着きて、昔むかし風ふうに頭巾ずきんを被かぶつてゐる患者等かんじやらが
 坐すわつたり、寐ねたりして、これは皆瘋癲みんなふうてん患者かんじやなのである。患かんじ
 者やの数は五人ごにん、その中うちにて一人ひとりだけは身分みぶんのある者ものであるが他た
 は皆卑みなひしい身分みぶんの者ものばかり。戸口とぐちから第一だいいちの者ものは、瘡やせて脊せの高たか
 い、栗色くりいろに光ひかる鬚ひげの、眼めを始終しじゆ泣腫なみらしている発はつき狂きやうの中ちゆう
 風患者ぶかんじや、頭あたまを支ささえてじつと坐すわつて、一つ所ところを瞶みつめながら、昼ちゆう
 夜うやも別わかかず泣なき悲かなしんで、頭あたまを振り太息といきを洩もらし、時ときには苦にが笑わらい
 をしたりして。周辺あたりの話はなしには稀まれに立入たちいるのみで、質問しつもんをされた
 ら決けつして返答へんとうをしたことことの無ない、食くう物ものも、飲のむ物ものも、与あたえら
 るるまままに、時とき々とき苦くるしくるそうさうな咳せきをする。その頬ほおの紅べに色いろや、瘡や

せかた 方さつで察さつするに彼かれにはもう肺病はいびようの初期しよきが萌きぎしているのであ
ろ。

それに続つづいては小体こがらな、元氣げんきな、頤鬚あごひげの尖とがつた、髪かみの黒くろいネ
グル人じんのように縮ちぢれた、すこしも落着おちつかぬ老人ろうじん。彼かれは昼ひるには室
つない内まどを窓まどから窓まどに往來おうらいし、或あるいはトルコ風ふうに寢台ねだいに跣あぐらを坐かいて、
やまがら山雀とのように止とめ度どもなく囁さえずり、小聲こごえで歌うたい、ヒヒヒと頓とんきよ
興うに笑わらい出だしたりしてゐるが、夜よるに祈きとうをする時ときでも、やはり
元氣げんきで、子供こどものように愉快ゆかいそうにぴんぴんしている。拳こぶしで胸むねを打う
つて祈いのるかと思おもえば、直すぐに指ゆびで戸との穴あなを穿ほつたりしている。これ
は猶じ太人ウのモイセイカと云いう者もので、二十年ねんばかり前まえ、自分じぶんが所しよゆ
有うの帽子ぼうし製造場せいぞうばが焼やけた時ときに、発はつきよう狂きやうしたのであつた。

六号室ごうしつの中でこのモイセイカばかりは、庭にわにでも町まちにでも自
 由ゆうに外出でるのを許ゆるされていた。それは彼かれが古ふるくから病びょういん院いんにいる
 ため、町まちで子供等こどもらや、犬いぬに囲かこまれていても、決けつして他たに何等なんらの害がい
 をも加くわえぬと云いうことを町まちの人ひとに知しられてゐる為ためか、とにかく、
 彼かれは町まちの名物めいぶつ男おとことして、一人ひとりこの特とつ権けんを得えていたのである。
 彼かれは町まちを廻まわるに病びょういん院いん服ふくのまま、妙みょうな頭巾ずきんを被かぶり、上うわ靴ぐつを穿は
 いてる時ときもあり、或あるは跣はだし足あしでズボンした下はも穿はかずあるに歩あるいてゐる時ときも
 ある。そうして人ひとの門かどや、店みせ前さきに立たつては一せん銭せんずつを請こう。或ある
 家いえではクワスを飲のませ、或ある所ところではパンを食くわしてくれらる。で、彼かれ
 はいつちも満まん腹ぶくで、金かね持もちになつて、六号室ごうしつに帰かえつて来くる。が、
 その携たぎさかえとところの物ものは、玄関げんかんでニキタみんなばに皆奪みなわれてしまう。兵へ

隊上りの小使のニキタは乱暴にも、隠を一々転覆え
 して、すっかり取返えしてしまふのであつた。

またモイセイカは同室の者にも至つて親切で、水を持つて
 来て遣り、寐る時には布団を掛けて遣りして、町から一錢ずつ貰
 つて来て遣るとか、各に新しい帽子を縫つて遣るとかと云う。左
 の方の中風患者には始終匙でもつて食事をさせる。彼がか
 くするのは、別段同情からでもなく、と云つて、或る情
 誼からするのでもなく、ただ右の隣にいるグロモフと云う人に
 習つて、自然その真似をするのであつた。

イワン、デミトリチ、グロモフは三十三歳で、彼はこの室での
 身分のいいもの、元來は裁判所の警吏、また県庁の書記を

も務めたので。彼は人が自分を窘逐すると云うことを苦にして
 いる瘋癲患者、常に寢台の上に丸くなつて寢ていたり、或は
 運動の為かのように、室を隅から隅へと歩いて見たり、坐つて
 いることは殆ど稀で、始終興奮して、燥氣して、曖昧なあ
 る待つことで気が張つている様子。玄関の方で微な音でもする
 か、庭で声でも聞こえるかすると、直ぐに頭をもち上げて耳を欬て
 る。誰か自分の所に来たのでは無いか、自分を尋ねているのでは
 無いかと思つて、顔には謂うべからざる不安の色が顕われる。さ
 なきだに彼の憔悴した顔は不幸なる内心の煩悶と、長
 日月の恐怖とにて、苛責まれ抜いた心を、鏡に写したよう
 に現わしているのに。その広い骨張つた顔の動きは、如何にも変

で病的びょうてきであつて。しかし心の苦痛くるつうにて彼の顔かおに印いんせられた緻ち
 密みつな徴ちようこう候こうは、一見けんして智慧ちえありそうな、教きよう育いくありそうな
 風ふうに思おもわしめた。そうしてその眼めには暖あたか健けん全ぜんな輝かががある、彼かれ
 はニキタを除のぞくの外ほかは、誰たれに対たいしても親しん切せつで、同どう情じようがあつ
 て、謙遜けんそんであつた。同どう室しつで誰だれかが鈕ぼたんを落おとしたとか匙さじを落おと
 したとか云いう場合ばあいには、彼かれがまず寝台ねだいから起おき上あつて、取とつて遣やる。
 毎まい朝あさ起おきると同どう室しつの者等ものらにお早はやうと云いい、晚ばんにはまたお休やす息みな
 さいと挨拶あいさつもする。
 彼かれの癡狂はつきよう者しやらしい所ところは、始しじ終ゆう氣きの張はつた様よう子すと、変へんな眼め付つき
 とをするの外ほかに、時折ときおり、晚ばんになると、着きている病びよう院いん服ふくの前まえ
 を神しん經けい的てきに搔かき合あわせると思おもうと、齒はの根ねも合あわぬままででに全ぜん身しん

を顛ふるわし、隅すみから隅すみへと急いそいで歩あゆみ初はじめる、丁ちやうど度ど激はげしい熱ねつびよ
 病うにでも俄にわかに襲おそわれたよう。と、やがて立たち留とどままつて室しつ内ないの
 ひとびとを眺みまわして昂こう然ぜんとして今いまにも何なにか重じゆう大だいなことを云いわん
 人々ひとびとを眺みまわして昂こう然ぜんとして今いまにも何なにか重じゆう大だいなことを云いわん
 とするようみな身み構かまえをする。が、また直ただちに自じ分ぶんの云いうことを聴きく
 ものなは無ない、その云いうことが解わかるものは無ないとでも考かんえ直なおしたかの
 者ものは無ない、その云いうことが解わかるものは無ないとでも考かんえ直なおしたかの
 ように燥いらだ立たつて、頭あたまを振ふりながらまた歩あるき出だす。しかるに言いおう
 と云いう望のぞみは、終ついに消きえず忽たちまちにして総すべて考かんがえ去あつつて、こんどは
 おもぞんぶん、熱ねつ切せつに、夢むちゆう中ちゆうの有あり様さまで、言ことばが逆さかり出でる。言いう
 思おもう存ぞん分ぶん、熱ねつ切せつに、夢むちゆう中ちゆうの有あり様さまで、言ことばが逆さかり出でる。言いう
 所ところは勿もちろん論ろん、秩ちつ序じよなく、寐ね言ごとのようみで、周あわ章てて見みたり、途とぎ切ぎれ
 て見みたり、何なんだか意い味みの解わからぬことを言いうのであるが、どこかに
 また善ぜんりりよう良よなる性せい質しつが微ほかに聞きえる、その言ことばの中うちか、声こえの中うちか

に、そうして彼の瘋癲者たる所も、彼の人格もまた見える。その意味の繋がらぬ、辻妻の合わぬ話は、所詮筆にすること
 は出来ぬのであるが、彼の云う所を撮んで云えば、人間の卑劣
 なること、圧制に依りて正義の蹂躪されてゐること、後
 世地上に来るべき善美なる生活のこと、自分をして一分毎
 にも圧制者の残忍、愚鈍を憤らしむる所の、窓の鉄格子の
 ことなどである。云わば彼は昔も今も全く歌い尽されぬ歌を、不
 順序に、不調和に組立てるのである。

(一一)

いま 今から大凡十三四年以前、この町の一番の大通りに、自分
 の家を所有つていたグロモフと云う、容貌の立派な、金満の
 官吏があつて、家にはセルゲイ及びイワンと云う二人の息子もあ
 る。所が、長子のセルゲイは丁度大学の四年級になつ
 てから、急性の肺病に罹り死亡してしまふ。これよりグ
 ロモフの家には、不幸が引続いて来てセルゲイの葬式の終
 だ一週間目、父のグロモフは詐欺と、浪費との件を以て裁
 判に渡され、間もなく監獄の病院でチブスに罹つて死亡
 してしまつた。で、その家と総の什具とは、棄売に払われて、
 イワン、デミトリチとその母親とは遂に無一物の身となつた。
 父の存命中には、イワン、デミトリチは大学修業の

ためにペテルブルグに住んで、月々六七十円ずつも仕送され、
 何不自由なく暮らしていたものが、忽にして生活は一変し、朝から
 晩まで、安値の報酬で学科を教授するとか、筆耕
 をするとかと、奔走をしたが、それでも食うや食わずの儚なき
 境涯。僅な収入は母の給養にも供せねばならず、彼
 は遂にこの生活には堪え切れず、断然大学を去つて、古
 郷に帰つた。そうして程なく或人の世話で郡立学校の教
 師となつたが、それも暫時、同僚とは折合わず、生徒とは
 親昵まず、ここをもまた辞してしまふ。その中に母親は死ぬ。
 彼は半年も無職で徘徊してただパンと、水とで生命を繋い
 でいたのであるが、その後裁判所の警吏となり、病を以て後に

この職を辞するまでは、ここに務を取つていたのであった。

彼は学生時代の壮年の頃でも、生得余り壮健な身体で

は無かつた。顔色は蒼白く、姿は瘠せて、しよつちゆう風邪

を引き易い、少食で落々眠られぬ質、一杯の酒にも眼が廻

り、ままヒステリーが起るのである。人と交際することは彼は

至つて好んでいたが、その神経質な、刺激され易い性質なる

が故に、自ら務めて誰とも交際せず、随てまた親友をも持た

ぬ。町の人々のことは彼はいつも軽蔑して、無教育の徒、

禽獸的生活と罵つて、テノルの高声で燥立っている。彼

が物を言うのは憤懣の色を以てせざれば、欣喜の色を以て、何

事も熱心に言うのである。で、その言う所は終に一つことに

歸きしてしままう。町まちで生せい活かつするのこのは好このましく無ない。社しゃ会かいには高こうしようう
 尚ななる興いん味てれが無ない。社しゃ会かいは曖あい昧まいな、無む意い味みな生せい活かつ
 を為なしている。圧あつ制せい、偽ぎ善ぜん、醜しゅう行こうを逞たくましゆ
 を紛まらしている。ここにおいてか奸かん物ぶつ共どもは衣い食しょくに飽あき、正せい義ぎ
ひとの人は衣い食しょくに窮きゆうする。廉れん直ちよくなる方ほう針しんを取とる地ち方ほうの新聞しんぶん
 紙し、芝しばい居い、学がく校こう、公こう会かい演えん説せつ、教きょう育いくある人にん間げんの団だん結けつ
 、これらみなは皆ひつ必要よう欠かぐ可べからぎるものである。また社しゃ会かい自みずか
さとら悟おどろつて驚おどろくようにしなければならぬとかなどのことで。彼かれは
 その眼がん中ちゆうに社しゃ会かいの人ひと々びとをただ二しゆ種くべつに区く別べつしている、義ぎ者しゃ
 と、不ふ義ぎ者しゃと、そうして婦ふ人じんのこと、恋れん愛あいのことに就ついては、
 いつも自みら深ふかく感かんじ入いつて説とくのであるが、さて自じ身しんにはいまだ

一度も恋愛ちようものを味うたことは無いので。

彼はかくも神経質で、その議論は過激であつたが、町の人

々はそれにも拘らず彼を愛して、ワアニア、と愛嬌を以て

呼んでいた。彼が天性の柔しいのと、人に親切なのと、礼儀

のあるのと、品行の方正なのと、着古したフロツクコート、

病人らしい様子、家庭の不遇、これらは皆総て人々に温き

同情を引き起さしめたのであつた。また一面には彼は立派な

教育を受け、博学多識で、何んでも知つていと町の人は

言うている位で、彼はこの町の活きた字引とせられていた。

彼は非常に読書を好んで、しばしば倶楽部に行つては、神

經的に髭を捻りながら、雑誌や書物を手当次第に剥いでい

る、読んでいるのではなく咀かみ間ま合あわぬので鵜う呑のみにしていると云いうような塩あん梅ばい。読どく書しよは彼かれの病びよ的うてきの習しゆ慣うで、何なんでもおおよよてて触ふれた所ところの物ものは、それがよし去きよ年ねんの古ふる新しん聞ぶんであろうが、曆こよみであろうが、一よう様うに饑うえたる者もののように、きつと手てに取とつて見みるのである。家いえにいる時ときもいつも横よこになつては、やはり、書し見けんに耽ふけつてゐる。

(三)

ある秋あきの朝あさのこと、イワン、デミトリチは外がい套とうの襟えりを立たてて泥ぬ濘かつてゐる路みちを、横よこ町ちよう、路ろ次じと経へて、或ある町ちよう人にんの家いえに

書付かきつけを持って金かねを取りに行つたのであるが、やはり毎朝まいあさのよ
 うにこの朝あさも氣きが引立ひきたたず、沈しずんだ調子ちようしで或る横町よこちように差さ
 掛かると、折おりから向むこうより二人ふたりの囚人しゆうじんと四人にんじゆうの銃じゆうを負おうて附添つきそ
 うて来る兵卒へいそつとに、ぱつたりと出會でつくわす。彼かれは何時いつが日も囚人しゆう
 人じんに出會でつくわせば、同情どうじようと不愉快ふゆかいの感かんに打うたれるのであるが、
 その日ひはまたどう云いうものか、何なんとも云いわれぬ一種しゆのいやな感かん
 覚くが、常つねにもあらずむらむらと湧わいて、自分じぶんもかく枷かせを箝はめら
 れて、同おなじ姿すがたに泥濘ぬかるみの中なかを引ひかれて、獄ごくに入いれられはせぬかと、邊にわか
 に思おもわれて慄然ぞつとした。それから町人ちようにんの家いえよりの帰途かえり、郵ゆう便びん
 局きよくの側そばで、予かねて懇意こんいな一人ひとりの警部けいぶに出遇であつたが警部けいぶは彼かれに
 握手あくしゆして数歩すうほばかり共ともに歩あるいた。すると、何なんだかこれかれがまた彼かれ

には只事ただごとでなく怪あやしく思おもわれて、家いえに歸かえつてからも一日いちじゆう中ちゆう、
 彼の頭かれあたまから囚しゆうじん人の姿すがたじゆう、銃おを負おうてる兵卒へいそつの顔かおなどが離はなれず
 に、眼前がんぜんに閃ちらつ付ついてゐる、この理由わけの解わからぬ煩悶はんもんが怪あやしくも
 絶たえず彼の心かれこころを攪乱かくらんして、書物しよもつを讀よむにも、考かんがうるにも、邪じ
 魔やまをする。彼は夜かれよるになつても灯あかりをも点つけず、夜よもすがら眠ねむらず、今いま
 にも自分じぶんが捕縛ほぼくされ、獄ごくに繋つながれはせぬかとただそればかりを思おも
 い悩なやんでゐるのであつた。
 しかし無論むろん、彼は自身かれじしんに何なんの罪つみもなきこと、また将しやうらい来らいにお
 いても殺さつじん人じん、窃盜せつとう、放火ほうかなどの犯罪はんざいは断だんじてせぬとは知しつ
 ているが、また独ひとりつくづくところも思おもうたのであつた。故意こゝいなら
 ず犯罪はんざいを為なすことが無ないとも云いわれぬ、人ひとの讒言ざんげん、裁判さいばんの

間違まちがなどにはあり得うべからざることだとは云いわれぬ、そもそも裁さ
 判いはんの間違まちがは、今日こんにちの裁判さいばんの状じょう態たいにては、最ももあり得う
 べきことなので、総そうじて他人たにんの艱難かんなんに對たいしては、事務上じむじょう、職
 務よくむじょう上じょうの関係かんけいをもっている人々ひとびと、例たとえば裁判官さいばんかん、警官けいかん、
 医師いし、とかと云いうものは、年月ねんげつの経過けいかすると共に、習しゅう慣かんに
 依よつて遂ついにはその相手あいての被告ひこく、或あるは患者かんじやに對たいして、単たんに形けい式しき
 以上いじょうの関係かんけいをもたぬように望のぞんでも出来できぬように、この習しゅう
 慣かんと云いう奴やつがさせてしままう、早はやく言いえれば彼等かれらは恰あだかも、庭にわに立たつ
 へつじ、羊うしや、牛ほふを屠ほり、その血ちには氣きが着つかぬ所ところの劣等れつとうの人間にんげんと
 少すこしも選えらぶ所ところは無ないのだ。

翌朝よくあさイワン、デミトリチは額ひたいに冷汗ひやあせをびつしよりと搔かいて、

床から吃驚して跳起きた。もう今にも自分が捕縛されると思われて。そうして自らまた深く考えた。かくまでも昨日の奇しき懊惱が自分から離れぬとして見れば、何か訳があるのである、さなくともこの忌わしい考がこんなに執念く自分に着纏うている訳は無いと。

『や、巡査が徐々と窓の傍を通つて行つた、怪しいぞ、やや、また誰か二人家の前に立留つている、何故黙つているのだからか？』

これよりしてイワン、デミトリチは日夜をただ煩悶に申し続ける、窓の傍を通る者、庭に入る者は皆探偵かと思われる。正午になると毎日警察署長が、町尽頭の自分の邸から警

察へ行くので、この家の前を二頭馬車で通る、するとイワン、
 デミトリチはその度毎、馬車が余り早く通り過ぎたようだとか、
 署長の顔付が別であつたかと思つて、何んでもこれは町に
 重大な犯罪が露頭われたのでそれを至急報告するので
 あるうなどと極めて、頻りにそれが気になつてならぬ。

家主の女主人の処に見知らぬ人が来さえすればそれも苦に
 なる。門の呼鈴が鳴る度に惴々しては顫上る。巡查や、
 憲兵に遇いでもすると故と平気を粧うとして、微笑して見た
 り、口笛を吹いて見たりする。如何なる晩でも彼は拘引され
 るのを待ち構えていぬ時とては無い。それが為に終夜眠られぬ。
 が、もしこんなことを女主人にでも嗅付けられたら、何か良

心しんに咎とがめられることがあると思われよう、そんな疑うたがでも起おこされ
 たら大たい変へんと、彼かれはそう思おもつて無む理りに毎まい晩ばん眠ねた振ふりをして、大おい
 びびきき 軀こをさえ発かいている。しかしこんな心こころ遣づは事じ実じつにおいても、
 普ふ通つうの論ろん理りにおいても考かんえて見みれば実じつに愚ぼ々ぼしい次じ第だいで、拘こう
 引いんされるだの、獄ろう舎やに繋つながれるなど云いうことは良り心ようしんにさえ
 疚やましい所ところが無ないならば少すこしも恐おそ怖るに足たらぬこと、こんなことを
 恐おそれるのは精せい神しん病びょうに相そう違いなきこと、と、彼かれも自みら思おもうてこ
 に至いたらぬのでも無ないが、さてまた考かんえれば考かんうる程ほど迷まよつて、心しん
 中ちゆうはいよいよ苦く悶もんと、恐き怖ようとに圧あつしられる。で、彼かれももう思か
 慮んがえることの無む益えきなのを悟さとり、すつかり失しつ望ぼうと、恐き怖ようとの淵ふち
 に沈しずんでしまったのである。

彼はそれより独居して人を避け初めた。職務を取るのには前にもいやであったが、今はなお一層いやで堪らぬ、と云うのは、人が何時自分を欺して、隠にでもそつと賄賂を突込みはせぬか、それを訴えられでもせぬか、或は公書の如きものに詐欺同様の間違でもしはせぬか、他人の銭でも無くしたりしはせぬかと、無暗に恐くてならぬので。

春になつて雪も次第に解けた或日、墓場の側の崖の辺に、腐爛した二つの死骸が見付かった。それは老婆と、男の子とで、故殺の形跡さえあるのであつた。町ではもう到る所、この死骸のこつと、下手人の噂ばかり、イワン、デミトリチは自分が殺したと思われはせぬかと、またしても気が気ではなく、通を歩きなが

からもそう思われまいと微笑しながら行ったり、知人に遇いで
 もすると、青くなり、赤くなりして、あんな弱者共を殺すな
 どと、これ程憎むべき罪悪は無いなど、云っている。が、それ
 もこれも直に彼を疲労らしてしまふ。彼はそこでふと思いついた、
 自分の位置の安全を計るには、女主人の穴蔵に隠れている
 のが上策と。そうして彼は一日中、また一晩中、穴
 蔵の中に立尽し、その翌日もやはり出ぬ。で、身体が甚く
 凍えてしまったので、詮方なく、夕方になるのを待つて、こ
 ツそりと自分の室には忍び出て来たものの、夜明まで身動もせ
 ず、室の真中に立っていた。すると明方、まだ日の出ぬ中、
 女主人の方へ暖炉造の職人が来た。イワン、デミトリチ

は彼等かれらが厨房くりやの暖炉だんろを直しなおに來たきのであるのは知しつていたのであ
 るが、急きゆうに何なんだかそうでは無ないように思おもわれて來きて、これはきつ
 と警官けいがんが故わざと暖炉だんろ職人しよくにんの風体ふうていをして來たきのであろうと、
 心こころは不覺そぞろ、氣きは動顛どうてんして、いきなり、室へやを飛出とびだしたが、帽ぼうも被かぶ
 らず、フロックコートも着きずに、恐おそれ怖おそれに驅かられたまま、大おお通とお
 を真ま一文字もんじに走はしるのであつた。一匹びきの犬いぬは吠ほえながら彼かれを追おう。
 後うしろの方ほうでは農夫のうふが叫さけぶ。イワン、デミトリチは両りよう耳みみがガんと
 して、世界せかい中じゆうのあらゆる圧制あつせいが、今いま彼の直すぐ背後うしろに迫せまつて、
 自分じぶんを追お駈かけて來たきかのように思おもわれた。
 彼かれは捕とらえられて家いえに引返ひきかえされたが、女主人おんなあるじは醫師いしやを招よびに
 遣やられ、ドクトル、アンドレイ、エヒミチは來きて彼かれを診察しんさつした

のであつた。

そうして頭あたまを冷ひやす薬くすりと、桂梅水けいばいすいとを服用ふくようするようと云いつて、いやそうに頭かしらを振ふつて、立たち歸かえり際ぎわに、もう二度どとは来こぬ、
 人の氣ひとの狂くるう邪魔じやまをするにも当あたらないからとそう云いつた。

かくてイワン、デミトリチは宿やどを借かりることも、療りようじ治じすること
 も、錢ぜにの無ないので出で来き兼かぬる所ところから、幾いく干ぼくもなくして町ちやうりつ立た
 病よういん院いんに入いれられ、梅ばい毒どく病びよう患かん者じやと同どう室しつすることとなつ
 た。しかるに彼かれは毎まい晩ばん眠ねむらずして、我わが儘ままを云いつては他ほかの患かんじ
 者やら等らの邪魔じやまをするので、院いん長ちやうの安あんドレい、エヒミチは彼かれ
 を六ごう号しつ室しつの別べつ室しつへ移うつしたのであつた。

一年ねんを經へて、町まちではもうイワン、デミトリチのことは忘わすれてし

まった。彼の書物は女主人が櫛の中に積重ねて、軒下に
 置いたのであるが、どこからともなく、子供等が寄つて来ては、
 一冊持ち行き、二冊取り去り、段々に皆何れへか消えてしまつた。

(四)

イワン、デミトリチの左の方の隣は、猶太人のモイセイカであ
 るが、右の方にいる者は、まるきり意味の無い顔をしている、油
 切つて、真円い農夫、疾うから、思慮も、感覚も皆無にな
 つて、動きもせぬ大食いな、不汚極る動物で、始終鼻を突くよ
 うな、胸の悪くなる臭気を放っている。

彼の身の周りを掃除するニキタは、その度に例の鉄拳を振つては、力の限り彼を打つのであるが、この鈍き動物は、音をも立てず、動きをもせず、眼の色にも何の感じをも現わさぬ。ただ重い樽のように、少し蹠踉るのは見るのも気味が悪い位。六号室の第五番目は、元來郵便局とやらに勤めた男で、気の善いような、少し狡猾いような、脊の低い、瘠せたブロンジンの、利発らしい瞭然とした愉快な眼付、ちよつと見るとまるで正気のようなのである。彼は何か大切な秘密な物をもつていと云うような風をしている。枕の下や、寢台のどこかに、何かをそつと隠して置く、それは盗まれるとか、奪われるとか、云う氣遣の爲めではなく人に見られるのが恥かしいのでそうして隠し

て置く物がある。時々同室の者等に脊を向けて、独窓の所に立って、何かを胸に着けて、頭を屈めて熟視つている様子。誰かもし近着でもすれば、極悪そうに急いで胸から何かを取って隠してしまふ。しかしその秘密は直に解るのである。

『私をお祝いなすつて下さい。』

と、彼は時々、デミトリチに云うことがある。

『私は第二等のスタンスラウの勳章を貰いました。この第二等の勳章は、全体なら外国人でなければ貰えないのですが、私にはその、特別を以てね、例外と見えます。』

と、彼は訝かるようにちよつと眉を寄せて微笑する。

『實を申しますと、これはちと意外でしたので。』

『わたくしはどうもそう云うものに就いては、まるで解らんのです。』
と、イワン、デミトリチは愁わしそうに答える。

『しかし私が早晚手に入れようと思ひますのは、何だか知つて
おいでになりますか。』

先もとの郵便局員ゆうびんきょくいんは、さも狡猾ずるそうに眼めを細ほそめて云う。

『私わたくしはきつとこんどは瑞典スウェーデンの北極星ほっきょくせいの勳章くんしょうを貰もらおう
と思おもつておるです、その勳章くんしょうこそは骨ほねを折おる甲斐かいのあるもの
です。白しろい十字架じかに、黒リボンの附ついた、それは立派りっぱです。』

この六号室程ごうしつほど単調たんちような生活せいかつは、どこを尋ねても無いであ
らう。朝あさには患者等かんじやらは、中風患者ちゆうぶかんじやと、油切あぶらぎつた農夫のうふとの
外ほかは皆玄関みんなけんかんに行つて、一つ大盥おおだらで顔かおを洗あらい、病院服びやういんふくの

裾すそで拭ふき、ニキタが本院ほんいんから運はこんで来る、一杯ぱいに定めさだられたる
 茶ちやを錫すずの器うつわで啜すするのである。正午ひるには酢すく漬つけた玉菜たまなの牛肉汁にくじると、
 飯めしとで食しょくじ事じをする。晚ばんには昼食ひるめしの余あまりの飯めしを食たべるので。そ
 の間あいだよこは横よこになるとも、睡ねむるとも、空そらを眺ながめるとも、室へやの隅すみから隅すみ
 へ歩あるくとも、こまうして毎まい日にちを送おくつている。
 新あたらしい人ひとの顔かおは六号室ごうしつでは絶たえて見みぬ。院いん長ちやうアンドレイ、
 エヒミチは新あらたな瘋癲ふうてん患者かんじやはもう疾とくより入にゆう院いんせしめぬか
 ら。また誰たれとてふうてんこんな瘋癲ふうてん者しやの室へやに参観さんかんに来くる者ものも無ないから。
 ただ二ヶ月げつに一度どだけ、理髮師とこやのセミヨン、ラザリチばかりここ
 へ来くる、その男おとこはいつも酔よつてニコニコしながら遣やつて来きて、ニ
 キタに手て伝つだわせて髪かみを刈かる、彼かれが見みえると患者かんじや等はがや囁がや々と云い

つて騒さわぎ出だす。

かく患者等かんじやらは理髮師とこやの外ほかには、ただニキタ一人ひとり、それより外ほかには誰たれに遇あうことも、誰たれを見みることも叶かなわぬ運命うんめいに定さだめられていた。

しかるに近頃ちかごろに至いたつて不思議ふしぎな評判ひょうばんが院内いんないに伝つたわつた。院長いんちようが六号室ごうしつに足繁あししげく訪問ほうもんし出したとの風評ひょうばん。

(五)

不思議ふしぎな風評ひょうばんである。

ドクトル、アンドレイ、エヒミチ、ラアギンは風変ふうがわりな人にんげ。

間で、青年の頃には甚敬虔で、身を宗教上に立てよ
 うと、千八百六十三年に中学を卒業すると直ぐ、神学
 大学に入ろうと決した。しかるに医学博士にして、外科専門
 家なる彼が父は、断乎として彼が志望を拒み、もし彼にして司
 祭となつた暁は、我が子とは認めぬとまで云張つた。が、ア
 レイ、エヒミチは父の言ではあるが、自分はこれまで医学に
 対して、また一般の専門学科に対して、使命を感じたことは無
 かつたと告白している。

とにかく、彼は医科大学を卒業して司祭の職には就かなか
 った。そうして医者として身を立つる初めにおいても、な
 お今日のごとく、別段宗教家らしい所は少なかった。彼の容貌

はぎすぎすして、どこか百姓染みて、頤鬚あごひげから、ベツそり
 した髪かみ、ぎごちない不態ぶざまな恰好かつこうは、まるで大食たいしょくの、呑抜のみぬけの、
 頑固がんこな街道端かいどうばたの料理屋りょうりやなんどの主人しゅじんのようで、素気無そつげない顔かお
 には青筋あおすじが顕あらわれ、眼めは小さく、鼻はなは赤あかく、肩幅かたはばひろ広く、脊高せいたかく、
 手足てあしが図抜ずぬけて大おおきい、その手てで捉つかまえられようものなら呼吸こきゆう
 も止とまりそうな。それでいて足音あしおとは極ごくく静しずかで、あるようすは注ちゆう
 意深いぶかい忍しのびあし 足のようである。狭せまい廊下ろうかで人ひとに出遇であうと、まづ
 道みちを除よけて立留たちどまり、『失敬しつげい』と、さも太ふとい声こえで云いいそうだが、
 細ほそいテノルでそう挨拶あいさつする。彼の頸かれくびには小ちいさい腫物はれものが出来できて
 いるので、常つねに糊付のりつけシャツは着きかないで、柔やわらかな麻布あさか、更紗さらさ
 のシャツを着きているので。そうしてその服装ふくそうは少すこしも医者いしやらし

い所は無く、一つフロックコートなを十年も着続けている。稀まれに猶ジ太人の店ウで新しい服みせを買あたらつて来ても、彼かれが着るとやはり皺しわだらけふるぎな古着ふるぎのように見えるので。一つフロックコートで患者かんじやも受けうけ、食しょくじ事じもし、客きやくにも行くゆ。しかしそれは彼かれが吝りん嗇しやくなるのではなく、扮装なりなどには全く無頓着むとんじやくなのに由よるのである。

アンドレイ、エヒミチが新あらたに院いんちよう長まちとしてこの町まちに来た時は、この病びよういん院らんみやくの乱脈めいじようは名状なんじようすべからざるもので。室内しつないと云いわず、廊下ろうかと云いわず、庭にわと云いわず、何なんとも云いわれぬ臭しゆうき気が鼻はなを衝ついて、呼吸いきをするささえ苦くるしい程ほど。病びよういん院こづかいの小使こづかい、看護かん婦ごふ、その子供等こどもらなどは皆患者みなかんじやの病びようしつ室しよに一所しよに起臥きがして、外げ科かしつ室たんどくには丹毒たんどくが絶たえたことは無い。患者等かんじやらは油虫あぶらむし、南なんき

京虫、ねずみやからせ、鼠の族に責め立てられて、住んでいゝことも出来ぬと苦情を云う。器械や、道具などは何もなく外科用の刃物が二つあるだけで体温器すら無いのである。浴盤には馬鈴薯が投げ込んであるような始末、代診、会計、洗濯女は、患者を掠めて何とも思わぬ。話には前の院長はままだ病院のアルコールを密売し、看護婦、婦人患者を手当次第妾としていたと云う。で、町では病院のこんな有様を知らぬのでは無く、一層棒大にして乱次の無いことを評判していたが、これに対しては人々は至つて冷淡なもので、寧ろ病院の弁護をしていた位。病院などに入るものは、皆病人や百姓共だから、その位な不自由は何でも無いことである、自

家かにいたならば、なおさら不自由ふじゆうをせねばなるまいとか、地方自ちほうじ治体ちたいの補助ほじよもなく、町独立まちどくりつで立派りっぱな病院びやういんの維持いじされようは無いとか、とにかく悪いながらも病院びやういんのあるのは無いよりも増ましであるとかと。

アンドレイ、エヒミチは院長いんちやうとしてその職しよくに就いた後のちかか
る乱脈らんみやくに對たいして、果はたしてこれを如何様いかように所置しよちしたろう、敏てきば
捷きと院内いんないの秩序ちつじよを改革かいかくしたろうか。彼かれはこの不順序ふじゆんじよに
對たいしては、さのみ氣きを留とめた様子ようすはなく、ただ看護婦かんごふなどの病びやう
室しつに寝ねることを禁きんじ、機械きかいを入れる戸棚とだなを二個備ふたつそなえつ付けたばか
りで、代診だいしんも、會計かいけいも、洗濯婦せんたくおんなも、元もとのままにして置おい
た。

アンドレイ、エヒミチは知識ちしきと廉れん直ちよくとを頗すこぶる好このみかつ愛あいして
 いたのであるが、さて彼かれは自分じぶんの周まわり圍わりにはそう云いう生せい活かつを設もう
 けることは到底とうてい出来できぬのであつた。それは氣き力りよくと、權けん力りよく
 における自信じしんとが足たりぬので。命めい令れい、主しゅ張ちやう、禁きん止し、ここう云い
 うことは凡すべて彼かれには出来できぬ。丁ちやう度ど声こえを高たかめて命めい令れいなどは決けつ
 て致いたさぬと、誰たれにか誓ちかいでも立たてたかのように、くれとか、持もつて
 来こいとかとはどうしても言いえぬ。で、物ものが食たべたくなつた時ときには、
 何時いつも躊ちゆう躇ちよしながら咳せき払ばらいて、そうして下げ女じよに、茶ちやでも
 呑のみたいものだとか、飯めしにしたいものだとか云いうのが常つねである、
 それ故ゆえに會かい計けい係がかりに向むかつても、盗ぬすんではならぬなどは到底とうてい
 云いわれぬ。無むろん論ほう放ちく逐ちくすることなどは為なし得えぬので。人ひとが彼かれを欺あざむ

いたり、或は諂つたり、或は不正の勘定書に署名をするこ
 とを願いでもされると、彼は蝦のように真赤になつてひたすらに
 自分の悪いことを感じはする。が、やはり勘定書には署名
 をして遣ると云うような質。

初にアンドレイ、エヒミチは熱心にその職を励み、毎日朝
 から晩まで、診察をしたり、手術をしたり、時には産婆を
 もしたのである、婦人等は皆彼を非常に褒めて名医である、殊
 に小児科、婦人科に妙を得ていると言囃していた。が、彼は
 年月の経つと共に、この事業の単調なものと、明瞭に益
 の無いのを認めるに従つて、段々と厭きて来た。彼は思つた
 のである。今日は三十人の患者を受ければ、明日は三十五人來

る、明後日は四十人に成つて行く、かく毎日、毎月同事を繰返し、打続けては行くものの、市中の死亡者の数は決して減じぬ。また患者の足も依然として門には絶えぬ。朝から午まで来る四十人の患者に、どうして確実な扶助を与えることが出来よう、故意ならずとも虚偽を為しつつあるのだ。一統計年度において、一万二千人の患者を受けたとすれば、即ち一万二千人は欺かれたのである。重い患者を病院に入院させて、それを学問の規則に従つて治療することは出来ぬ。如何なれば規則はあつても、ここに学問は無いのである。哲学を捨てしまつて、他の医師等のように規則に従つて遣らうとするのには、第一に清潔法と、空気の流通法とが欠くべ

からぎる物ものである。しかるにこんな不潔ふけつな有様ありさまでは駄目だめだ。また滋養物じようぶつが肝心かんじんである。しかるにこんな臭くさい玉菜たまなの牛肉汁にくじるなどでは駄目だめだ、また善い補助者よほじよしやが必要ひつようである、しかるにこんな盗ぬすびと人ばかりでは駄目だめだ。

そうして死しが各人かくじんの正せい当とうな終おわりであるとするとするなれば、何なんのためために人々ひとびとの死しの邪魔じやまをするのか。仮かりにある商しょう人にんとか、ある官か吏りとかが、五年十年余計ねんねんよけいに生延いきのびたとして見た所みどころで、それが何なんになるか。もしまた医学いがくの目的もくてきが薬を以て、苦痛くつうを薄うすらげるものと為なすなれば、自然しぜんここに一つの疑問ぎもんが生くじて来る。苦痛くつうを薄うすらげるのは何なんのためためか？ 苦痛くつうは人ひとを完全かんぜんに向むかわしむるものと云いうでは無ないか、また人類じんるいが果はたして丸薬がんやくや、水薬すいやくで、その苦痛くつう

が薄らぐものなら、宗 教や、哲学は必要が無くなったと
 棄るに至ろう。プシキンは死に先つて非常に苦痛を感じ、不幸
 なるハイネは数年間中風に罹つて臥していた。して見れば原
 始虫の如き我々に、せめて苦難ちようものが無かつたならば、
 まったく含蓄の無い生活となつてしまふ。からして我々は病
 気するのは寧ろ当然では無いか。

かかる議論にまるで心を圧しられたアンドレイ、エヒミチは遂
 に匙を投げて、病院にも毎日は通わなくなるに至つた。

(六)

彼の生活はかくの如くにして過ぎ行いた。朝は八時に起き、
 服を着換えて茶を呑み、それから書斎に入るか、或は病院
 に行くかである。病院では外来患者がもう診察を待
 構えて、狭い廊下に多人数詰掛けている。その側を小使や、
 看護婦が靴で煉瓦の床を音高く踏鳴して往来し、病院
 服を着ている瘠せた患者等が通つたり、死人も昇ぎ出す、不
 潔物を入れた器をも持つて通る。子供は泣き叫ぶ、通風は
 する。アンドレイ、エヒミチはこう云う病院の有様では、
 熱病患者、肺病患者には最もよくないと、始終思い思い
 するのであるが、それをまたどうすることも出来ぬのであつた。
 代診のセルゲイ、セルゲイチは、いつも控所に院長

の出て来るのを待つている。この代診は脊の小さい、丸く肥つた男、頬髯を綺麗に剃つて、丸い顔はいつもよく洗われていて、その気取つた様子で、新しいゆつとりした衣服を着け、白の襟飾をした所は、まるで代診のようではなく、元老議員とでも言いたいようである。彼は町に沢山の病家の顧主を持つている。で、彼は自分を心窃に院長より遙に実際において、経験に積んでいゝものと認めていた。何となれば院長には町に顧主の病家などは少しも無いのであるから。控所は、壁に大きい額縁に填つた聖像が懸つていて、重い灯明が下げてある。傍には白い布を被せた読経台が置かれ、一方には大主教の額が懸けてある、またスウヤトコルスキイ修

道院ゆうどういんの額がくと、枯かれた花環はなわとが懸かけてある。この聖像せいぞうは代だい
 診み自みら買かつてここに懸かけたもので、毎日曜日まいにちようび、彼かれの命令めいれいで、
 誰だれか患者かんじやの一人ひとりが、立たつて、声こえを上げて、祈き禱とう文ぶんを読よむ、そ
 れから彼かれは自身じしんで、各病室かくびようしつを、香炉こうろを提さげて振ふりながら廻まわる。
 患者かんじやは多いのに時間じかんは少ない、で、いつも極ごくく簡かん単たんな質しつ
 問もんと、塗ぬり薬ぐすりか、※麻ひまし子あぶら油ぐらい位くすりの薬わたを渡やして遣とどるのに留とどま
 っている。院いんちよう長かたては片手ほおづえで頰つ杖つを突かんがえきながら考かんがえ
 込こんで、ただ機き械かいて的きに質しつ問もんを掛かけるのみである。代だい診しんのセルゲイ、
 セルゲイセルゲイが時とき々とき手こすを擦こすり擦こすり口くちを入いれる。『この世よには皆み人ひと
 が病び気きになります、入い用りようなものがありません、何なんとなれば、
 これ皆みな親しん切せつな神かみ様さまに不ふ熱ねつ心しんでありますから。』診しん察さつの時とき

に院長はもう疾うより手術をすることは止めていた。彼は血を見るさえ不愉快に感じていたからで。また子供の咽喉を見るので口を開かせたりする時に、子供が泣叫び、小さい手を突張ったりすると、彼はその声で耳がガンとしてしまつて、眼が廻つて涙が滴れる。で、急いで薬の処方云つて、子供を早く連れて行つてくれと手を振る。

診察の時、患者の臆病、訳の解らぬこと、代診の傍にいること、壁に懸つてる画像、二十年以上も相変わらずに掛けている質問、これらは院長をして少からず退屈せしめて、彼は五六人の患者を診察し終ると、ふいと診察所から出て行つてしまふ。で、後の患者は代診が彼に代つて診察

するのであつた。

院長いんちよう アンドレイ、エヒミチは疾とうから町まちの病家びょうかをもたぬのを、却かえつていい幸さいわいに、誰だれも自分の邪魔じやまをするものは無いと云かんがえう考こうで、家いえに帰かえると直すぐ書齋しよさいに入り、読よむ書物しよもつの沢山たくさんあるので、この上うえなき満足まんぞくを以もつて書見しよけんに耽ふけるのである、彼かれは月給げつきゆうを受取うけとると直すぐ半はん分ぶんは書物しよもつを買かうのに費ついやす、その六間ま借りてゐる室へやの三つには、書物しよもつと古雑誌ふるざっしとで殆ほとんども埋まつてゐる。彼かれが最も好このところむ所の書物しよもつは、歴史れきし、哲学てつがくで、医学上いがくじようの書物しよもつは、たゞヴラチ『医者』と云いう一雑誌ざっしを取とつてゐるのに過すぎぬ。読書どくしよし初はじめるといつても数時間すうじかんは続つづげさまに読よむのであるが、少すこしもそれで疲つかれぬ。彼かれの書見しよけんは、イワン、デミトリチのように神しん經けい的てきに、

迅速じんそくに読むよのではなく、徐しずかに眼めを通とおして、氣きに入いった所ところ、了りよう解かいし得えぬ所ところは、留とどり留まりしながら読よんで行ゆく。書物しよもつの側そばにはいつもウオツカの壘びんを置おいて、塩漬しおづけの胡瓜きゆうりや、林檎りんごが、デスクの羅紗らしやの布きれの上うえに置おいてある。半時間はんじかん毎ごとく毎ごとく位くらいに彼かれは書物しよもつから眼めを離はなさずに、ウオツカを一杯ぱいつ注ついでは吞乾のみほし、そうして矢張やはり見みずに胡瓜きゆうりを手探てさぐりで食くい欠かぐ。

三時じになると彼かれは徐しずかに厨房くりやの戸とに近ちかづいて咳せき払いばらいをして云いう。

『ダリユシカ、昼食ひるめしでも遣やりたいたいものだな。』

不味まずそうに取揃とりそろえられた昼食ひるめしを為なし終おえると、彼かれは両手りようてを胸むねに組くんで考かんえながら室しつ内ないを歩あるき初はじめる。その中うちに四時じが鳴なる。五時じが鳴なる、なお彼かれは考かんえながら歩あるいている。すると、時とき

々きくりや厨房の戸とが開あいて、ダリユシカの赤あかい寐惚ねぼけ顔がおが頭あらわれる。

『旦那様だんなさま、もうビールを召めし上あがります時分じぶんでは御座ござりませんか

。』

と、彼女かれは氣きを揉もんで問とう。

『いやまだ……もう少し待まちとう……もう少し……。』

と、彼かれは云いう。

晩ばんにはいつも郵便局ゆうびんきょく長のミハイル、アウエリヤヌイチが

遊あそびに来くる。アンドレイ、エヒミチに取とつてはこの人間ひとばかりが、

町まち中じゆうで一人ひとり氣きの置おけぬ親友しんゆうなので。ミハイル、アウエリヤ

ヌイチは元もとは富とんでいた大地主おおじぬし、騎兵隊きへいたいに属ぞくしていた者もの、し

かるに漸だんだん々しんだい身代しんだいを耗すつてしまつて、貧乏びんぼうし、老年ろうねんに成なつ

てから、遂ついににこの郵便局ゆうびんきょくに入はいつたので。至いたつて元気げんきな、壯そうけ
 健けんな、立派りっぱな白しろい頬鬚ほおひげの、快活かいかつな大おお声こゑの、しかも氣きの善よ
 い、感かんじ情じょうの深ふかい人にん間げんである。しかしまた極ごくく腹立はらだち易つぽい男おとこ
 で、誰だれか郵便局ゆうびんきょくに來きた者もので、反はん對たいでもするとか、同どう意いでも
 せぬとか、理屈りくつでも並ならべようものなら、真ま赤つかになつて、全ぜん身しんを
 顫ふるわして怒おこり立たち、雷らいのような声こゑで、黙だま！ と一かつ喝かつする。それ
 故ゆゑに郵便局ゆうびんきょくに行ゆくのは怖こわいと云いうは一般いぱんの評ひやう判ばん。が、彼かれ
 は町まちの者ものをかく部ぶ下かのようあつかに遇あうにも拘かわらず、院いん長ちやう
 イ、エヒミチばかりは、教きやう育いくがあり、かつ高こう尚しやうな心こころをも
 つていると、敬うやままいかつ愛あいしていた。

『やあ、私わたしです。』

と、ミハイル、アウエリヤヌイチはいつものようにこう云いながら、アンドレイ、エヒミチの家に入つて来た。

二人は書齋の長椅子に腰を掛けて、暫時莨を吹かしている。

『ダリュシカ、ビールでも欲しいな。』

と、アンドレイ、エヒミチは云う。

初めの壇は二人共無言の行で吞乾してしまう。院長は考

込んでいる、ミハイル、アウエリヤヌイチは何か面白い話を

をしようとして、愉快そうになっている。

話はいつも院長から、初まるので。

『何と残念なことじゃ無いですかなあ。』

と、アンドレイ、エヒミチは頭を振りながら、相手の眼を見ずに

のろのろ はなしだ 徐々と話出す。彼は話をする時に人の眼を見ぬのが癖。

『我々の町に話の面白い、知識のある人間の皆無なのは、

実に遺憾なことじゃありませんか。これは我々にと取つて大なる

不幸です。上流社会でも卑劣なこと以上にはその教

育の程度は上らんのですから、全く下等社会と少しも異らん

のです。』

『それは真実です。』と、郵便局長は言う。

『君も知つていられる通り。』

と、院長は静な声で、また話続けるのであった。

『この世の中には人間の知識の高尚な現象の外には、

一として意味のある、興味のあるものは無いのです。人智なるも

のが、動物と、人間との間に、大なる限界をなしておつて、
 人間の靈性を示し、或る程度まで、実際に無い所の不死の
 換りを為しているのです。これに由つて人智は、人間の唯一
 の快樂の泉となつてゐる。しかるに我々は自分の周囲に、些
 も知識を見ず、聞かずに、我々はまるで快樂を奪われている
 ようなものです。勿論我々には書物がある。しかしこれは
 活きた話とか、交際とかと云うものはまた別で、余り適切
 な例ではありませんが、例えば書物はノタで、談話は唱歌で
 しよう。』

『それは眞実です。』と、郵便局長は云う。
 二人は黙る。厨房からダリユシカが鈍い浮かぬ顔で出て来て、

かたて 片手で 頬杖をして、話を聞こうと戸口に立留っている。

『ああ君は今の人間から知識をお望みになるのですか？』

と、ミハイル、アウエリヤヌイチは嘆息して云うた。そうして

かれむかし 彼は昔の生活が健全で、愉快で、興味のあつたこと、その頃

の上流社会には知識があつたとか、またその社会では廉

んちよく 直、友誼を非常に重んじていたとか、証文なしで錢を

貸したとか、貧窮な友人に扶助を与えぬのを恥としていた

とか、愉快な行軍や、戦争などのあつたこと、面白い人

間、面白い婦人のあつたこと、また高加索と云う所は実にい

い土地で、或る騎兵大隊長の夫人に変者があつて、いつ

でも身に士官の服を着けて、夜になると一人で、カフカズの山

ゆう 中を案内者もなく騎馬で行く。話に聞くと、何でも韃靼人の村に、その夫人と、土地の某公爵との間に小説があったとのことだ、とかと。

『へへえ。』

と、ダリユシカは感心して聞いている。

『そうしてよく呑み、よく食つたものだ。また非常な自由主義の人間などもあつたツけ。』

アンドレイ、エヒミチは聞いてはいたが、耳にも留らぬ風で、何かを考えながら、ビールをチビリチビリと呑んでいる。

『私はどうかすると知識のある秀才と話をしていることを夢に見ることがあります。』

と、院長は突然にミハイル、アウエリヤヌイチの言を遮つて言うた。

『私の父は私に立派な教育を与えたです、しかし六十年代の思想の影響で、私を医者としてしまったが、私もしその時に父の言う通りにならなかつたなら、今頃は現代思潮の中、心となつていたであろうと思われます。その時にはきつとだいがく大学の分科の教授にでもなつていたのでしよう。無論知識なるものは、永久のものでは無く、変遷して行くものです。が、しかし生活と云うものは、忌々しい輪索です。思想の人間が成熟の期に達して、その思想が発展される時になると、その人間は自然自分がもうすでにこの輪索に掛つている遁

れる路みちの無なくなつてゐるのを感じかんます。實際じつさい人間にんげんは自分じぶんの意い旨しに反はんして、或あるは偶然ぐうぜんなことの為ために、無むから生活せいかつに喚出よびだされたものであるのです……。』

『それは眞実まったくです。』

と、ミハイル、アウエリヤヌイチは云いう。

アンドレイ、エヒミチはやはり相手あいての顔かおを見みずに、知識ちしきある者ものの話はなしばかりを続つづける、ミハイル、アウエリヤヌイチは注ちゆう意ういして聴きいていながら『それは眞実まったくです。』と、そればかりを繰くり返かえしてゐた。

『しかし君きみは靈れい魂こんの不死ふしを信しんじなさらんのですか？』
と、俄にわかにミハイル、アウエリヤヌイチは問とう。

『いや、ミハイル、アウエリヤヌイチ、信じません、信じる理由が無いのです。』と、院長は云う。

『実を申すと私も疑っているのです。しかしもつとも、私は或時は死なん者のような感もするですがな。それは時時こう思うことがあるです。』

こんな老朽な体は死んでもいい時分だ、とそう思うと、忽ちまた何やら心の底で声ができる、氣遣うな、死ぬことは無いと云っているような。』

九時少し過ぎ、ミハイル、アウエリヤヌイチは帰らんとて立上り、玄関で毛皮の外套を引掛けながら溜息して云うた。『しかし我々は随分酷い田舎に引込んだものさ、残念なの

は、こんな処ところで往おうじよう生せいをするのかと思おもうと、ああ……。

(七)

親友しんゆうを送出おくりだして、アンドレイ、エヒミチはまた読書どくしよを初はじめるのであつた。夜よるは静しずかで何なんの音おともせぬ。時ときは留とどまて院いんちよう長ちやうと共に書物しよもつの上うへに途絶とだえてしまつたかのよう。この書物しよもつと、青あおい傘かさを掛かけたランプとの外ほかには、世よにまた何物なにものもあらぬかと思おもわゆる静しずけさ。院いんちよう長ちやうの可畏むくつけき、無人相ぶにんそうの顔かおは、人智じんちの開か発はつに感かんずるに從したがつて、段々だんだんと和やわらぎ、微笑びしやうをさえ浮うかべて来きた。『ああ、どうして、人ひとは不ふ死しの者ものでは無ないか。』

と、彼は考かえてかんがている。『脳髓のうずいや、視官しかん、言語げんご、自覚じかく、天才てんさいなど、

どは、終ついには皆土中みなどちゆうに入はいつてしまつて、やがて地殻ちかくと共に冷れいきやく、

却やくし、何百万年なんびやくまんねんと云う長い間ながあいだ、地球ちきゆうと一所しよに意味いみもなく、

もくてきなく、廻り行くようになれば、何なんの為ためにこんな物ものが

目的もくてきも無く廻り行くようになれば、何なんの為ためにこんな物ものがあるのか……。』冷れいきやく却やくして後のち、飛散ひさんするとすれば、高こう尚しよう

なる殆ど神かみの如ごとき智力ちりよくを備そなへたる人間にんげんを、虚無きよむより造出つくりだす

の必要ひつようはない。そうして恰あたかも嘲あざけるが如ごとくに、また人ひとを粘土ねんどに化か

する必要ひつようは無い。ああ物質ぶつしつの新陳代謝しんちんたいしやよ。しかしながら

不死ふしの代だ替たいを以もつて、自分じぶんを慰なぐさむると云うことは臆おくびよう病びようではな

かろうか。自然しぜんにおいて起おこつて起おこつる所ところの無意識むいしきなる作用さようは、人間にんげんの無

智ちにも劣おとつている。何なんとなれば、無智むちには幾分いくぶんか、意識いしきと意旨いし

とがある。が、作用には何も無い。死に対して恐怖を抱く臆病者は、左のことを以て自分を慰めることが出来る。即ち彼の体を將來、草、石、墓の中に入れて、生活すると云うことを以て慰むることが出来る。

『それとも物質の変換……物質の変換を認めて、直に人間の不死と為すと云うのは、恰も高価なヴァイオリンが破れた後で、その明箱が換つて立派な物となると同じように、誠に訳の解らぬことである。』

時計が鳴る。アンドレイ、エヒミチは椅子の倚掛に身を投げて、眼を閉じて考える。そうして今読んだ書物の中の面白い影響で、自分の過去と、現在とに思を及すのであった。

『過去は思出すのもいやだ、と云つて、現在もまた過去と同
 様ではないか。』

と、彼はそれから患者等のこと、不潔な病室の中に苦しんで
 いること、などを思い起す。『まだ眠らないで南京虫と戦つ
 ている者もあるう、或は強く繃帯を締められて悩んで呻つてい
 る者もあるう、また或る患者等は看護婦を相手に骨牌遊をし
 ている者もあるう、或はヴオツカを呑んでいる者もあるう、病
 院の事業は総て二十年前と少しも変らぬ。窃盗、姦淫、
 詐欺の上に立てられているのだ。であるから、病院は依然と
 して、町の住民の健康には有害で、かつ不徳義なもので
 ある。』

と、彼は思い来り、更にまた彼の六号室の鉄格子の中で、ニキタが患者等を打殴つてゐること、モイセイカが町に行つては、施を請うてゐる姿などを思い出す。

それよりまた彼は医学のこの近き二十五年間において、如何に長足の進歩を為したかと云うことを考え初める。

『自分が大学にいた時分は、医学もやはり、錬金術や、形而上学などと同じ運命に至るものと思つていたが、実に驚く可き進歩である。大革命とも名けられる位だ、防腐法の発明によつて、大家のピロウゴフさえも、到底出来得べからざることゝ認つていた手術が、容易く遣られるようにはなつた。今では腹部截開の百度の中、死を見ることは一度位なもので

ある。梅毒も根治される、その他遺伝論、催眠術、パステルや、コッホなどの発見、衛生学、統計学などはどうであらう……。』

我々ロシアの地方団体の医術はどうであらうか、まず精神病に就いて云うならば、現在の病気の類別法、診断、治療の方法、共に皆これを過去の精神病学と比較するならば、その差はエリボルスの山の如き高大なるものである。現今では精神病者の治療に冷水を注がぬ、蒸暑きシャツを被せぬ、そうして人間的に彼等を取扱ふ、即ち新聞に記載する通り、彼等の為に、演劇、舞蹈を催す。彼はまたかく思考えた。

現時げんじの見解けんかい及び趣味しゆみを見るに、六号室ごうしつの如ごときは、誠まことに見るみに忍しのびざる、厭悪えんおに堪たえざるものである。かかる病室びやうしつは、鉄て道どうを去さること、二百露ヴエルスタ里リのこの小都会しょうとかいにおいてのみ見るのである。即すなわちこの市長しちよゐならび並びに町会ちやうかい議員ぎいんは皆生物みななまものし知りの町ちやうにん人である、であるから医師いしを見ることは神官しんかんの如ごとく、その言いう所ところを批評ひひようせずして信しんじている。例たとえば、溶解ようかいせる鉛なまりを口くちに入いるとも、少すこしも不思議ふしぎには思おもわぬであろう。が、もしこれが他たの所ところにおいてはどうであろうか、公衆こうしゆうと、新聞紙しんぶんしとは必かならずかくの如ごとき監獄ばんごくは、とうに寸断すんだんにしてしまったであろう。『しかしそれがどうである。』と、彼かれはパツと眼めを開ひらいて自みら問かずかうた。

『防腐法だとか、コツホだとか、パステルだとか云つたつて、
 實際においては世の中は少しもこれまでと変わらないでは無いか、
 病気の数も、死亡の数も、瘋癲患者の為だと云つて、舞
 踏会やら、演芸会やらが催されるが、しかし彼等をして全く
 開放することは出来ないでは無いか。して見れば、何でも皆空
 しいことだ、ヴィンナの完全な大学病院でも、我々のこ
 の病院と少しも差別は無なのだ。
 しかし俺は有害なことに務めてると云うものだ、自分の欺い
 ている人間から給料を貪っている、不正直だ、けれども
 俺その者は至つて微々たるもので、社会の必然の悪の分子
 に過ぎぬ、総て町や、郡の官吏共でも皆詰り無用の長物だ。

ただ給料を貪っているに過ぎん……そうして見れば不正直の罪は、敢て自分ばかりじゃ無い、時勢にあるのだ、もう二百年も晩く自分が生れたなら、まるで別の人間であつたかも知れぬ。

『三時が鳴る、彼はランプを消して寢室に行つた。が、どうしても睡眠に就くことは出来ぬのであつた。』

(八)

二年このかた、地方自治体はようよう饒になつたので、その管下に病院の設立られるまで、年々三百円ずつをこの町立

つびょういん 病院に補助金として出すこととなり、
 病 院ではそれが
 ため いいん ひとりま 為に医員を一人増すことと定められた。で、
 アンドレイ、エヒミ
 チの補助手として、軍医のエウゲニイ、
 フェオドロイチ、ハバ
 トフというが、この町に聘せられた。その人はまだ三十歳に足ら
 ぬ若い男で、頬骨の広い、眼の小さい、ブルネット、その祖先は
 外国人であつたかのようにも見える、彼が町に来た時は、
 銭と
 云つたら一文もなく、小さい靴只一個と、
 下女と徇っていた 醜
 いおんな
 女 ばかりを伴うて来たので、
 そうしてこの女には乳呑児があ
 った。彼は常に廂の附いた丸帽を被つて、
 深い長靴を穿き冬
 には毛皮の外套を着て外を歩く。病 院
 に来てより間もなく、
 代 診のセルゲイ、セルゲイチとも、
 会 計とも、直ぐに親密

になつたのである。下宿には書物はただ一冊『千八百八十一年度ヴィンナ大学病院最近処方』と題するもので、彼は患者の所へ行く時には必ずそれを携える。晩になると倶楽部に行つては玉突をして遊ぶ、骨牌は余り好まぬ方、そうして何時もお極りの文句をよく云う人間。

病院には一週に二度ずつ通つて、外来患者を診察したり、各病室を廻つたりしていたが、防腐法のここでは全おこな
 へ行われぬこと、呼吸器のことなどに就いて、彼は頗る異議をもつていたが、それと打付けて云うのも、院長に恥を搔かせるようなものと、何とも云わずにはいたが、同僚の院長アンドレイ、エヒミチを心秘に、老込の怠惰者として、

奴、金ばかり溜込んでいると羨んでいた。そうしてその後任を自分で引受けたく思っていた。

(九)

三月の末の方、消えがてなりし雪も、次第に跡なく融けた或夜、病院の庭には椋鳥が切りに鳴いてた折しも、院長は親友の郵便局長の立帰えるのを、門まで見送らんと室を出た。丁度その時、庭に入つて来たのは、今しも町を漁つて来た猶太人のモイセイカ、帽も被らず、跣足に浅い上靴を突掛けたまま、手には施の小さい袋を提げて。

『一銭せんおくんなきさい!』

と、モイセイカは寒さむさに顫ふるえながら、院いんちよう長ちようを見て微笑びしょうする。
 辞じすることの出来できぬ院いんちよう長ちようは、隠かくしから十銭せんを出だして彼かれに遣やる。
 『これはよくない』と、院いんちよう長ちようはモイセイカの瘡やせた赤あかい跣はだし足の蹠くるぶしを見みて思おもうた。

『路みちは泥濘ぬかつていると云いうのに。』

院いんちよう長ちようは不覚そぞろに哀あわれにも、また不気味ぶきみにも感かんじて、猶じ太人ウの
 後あとに尾ついて、その禿はげ頭あたまだの、足あしの蹠くるぶしなどを眴みまわしながら、別べつ
 室つまで行いった。小使こづかいのニキタは相あいも変かわらず、雑がらくた具つの塚つかの上うへ
 に転ころがっていたのであるが、院いんちよう長ちようの入はいつて来きたのに吃驚びっくりして
 跳起はねおきた。

『ニキタ、今日こんにちは。』

と、院いんちよう長ちやうは柔やさしく彼かれに挨拶あいさつして。

『この猶じ太人ウに靴くつでも与あたえたらどうだ、そうでもせんと風邪かぜを引ひく。』

『はッ、拝承かしこまりまして御坐ござります。直すぐに会計かいけいにそう申もうしまして。』

『そうして下ください、お前まえは会計かいけいに私わたしがそう云いつたと云いつてくれ。』

玄関げんかんから病室びやうしつへ通かよう戸とは開ひらかれていた。イワン、デミトリチは寢台ねだいの上うへに横よこになつて、肘ひじを突ついて、さも心配しんぱいそうに、人声ひとこゑがするので此方こなたを見みて耳みみを欻そばだだている。と、急きゆうに來きた人ひとの

院長だど解つたので、彼は全身を怒に顫わして、寢床から飛び上がり、真赤になつて、激怒して、病室の真中に走り出て突立つた。

『やあ、院長が来たぞ!』

イワン、デミトリチは高く※んで、笑い出す。

『来た来た! 諸君お目出とう、院長閣下が我々を訪

問せられた! コン畜生め!』

と、彼は声を甲走らして、地鞆踏んで、同室の者等のいま

だかつて見ぬ騒方。

『こん畜生! やい毆殺してしまえ! 殺しても足るもの

か、便所にでも敲打め!』

院いんちよう長のアンドレイ、エヒミチは玄関げんかんの間から病室びようしつの内なかを覗のぞきこ込んで、物もの柔やわらかに問とうのであつた。

『何故なぜですね?』

『何故なぜだと。』と、イワン、デミトリチは嚇おどすような気味きみで、院いんちようの方ほうに近寄ちかより、顫ふるう手に病院服びやういんふくの前まえを合あわせながら、

『何故なぜかも知なりないものだ! この盗人ぬすびとめ!』

彼かれは悪にく々にくしそうに唾つばでも吐はつ掛かけるような口付くちつきをして。

『この山師やまし! 人殺ひところし!』

『まあ、落着おちつきなさい。』

と、アンドレイ、エヒミチは悪わるかったと云いうような顔付かおつきで云いう。

『よくお聴きなさい、私はまだ何にも盗んだこともなし、貴方に何も致したことは無いのです。貴方は何か間違ってお出なものでしよう、酷く私を怒っていないさるようだが、まあ落着いて、静かに、そうして何を立腹していないさるのか、有仰ったらいいでしよう。』

『だが何の為に貴下は私をこんなところに入れて置くのです？』

『それは貴君が病人だからです。』

『はあ、病人、しかし何百人と云う狂人が自由にそこら辺を歩いているではないですか、それは貴方々の無学なるに由つて、狂人と、健康なる者との区別が出来んです。何のためわたし為に私だの、そらここにいるこの不幸な人達ばかりが恰も献

祭の山羊の如くに、衆の為にここに入れられていねばならんのか。貴方を初め、代診、会計、それから、総てこの貴方の病
 院にいる奴等は、実に怪しからん、徳義上においては我々
 われわれはもがれつとう、何の為に我々ばかりがここに入れられて
 共より遙に劣等だ、おつて、貴方々はそれで無いのか、どこにそんな論理がありま
 す?』

『徳義上だとか、論理だとか、そんなことは何もありません。
 ただ場合です。即ちここに入れられた者は入っているのであるし、
 入れられん者は自由に出歩いている、それだけのことです。私が
 医者で、貴方が精神病者であると云うことにおいて、徳義も
 無ければ、論理も無いのです。詰り偶然の場合のみです。』

『そんな屁理窟は解らん。』

と、イワン、デミトリチは小声で云つて、自分の寢台の上に坐り込む。

モイセイカは今日は院長のいる為に、ニキタが遠慮してなにとりかえ何も取返さぬので、貰つて来た雑物を、自分の寢台の上に洗いざらひろ浚い広げて、一つ一つ並べ初める。パンの破片、紙屑、牛の骨など、そうして寒に顫えながら、猶太語で、早言に歌うようにしゃべり出す、大方開店でもした気取で何かを吹聴しているのである。

『私をここから出して下さい。』と、イワン、デミトリチは声をふるわして云う。

『それは出来ません。』

『どう云う訳で。それを聞きましよう。』

『それは私の権内に無いことなのです。まあ、考えて御覧なさい、私が仮に貴方をここから出たとして、どんな利益がありますか。まず出て御覧なさい、町の者か、警察かがまた貴方を捉えて連れて参りましよう。』

『左様さ左様さそれはそうだ。』と、イワン、デミトリチは額の汗を拭く、『それはそうだ、しかし私はどうしたらよかろう。』

アンドレイ、エヒミチはイワン、デミトリチの顔付、眼色などを酷く気に入って、どうかしてこの若者を手懐けて、落着かせようと思うたので、その寢台の上に腰を下し、ちよつと考えて、

さて言出す。

『貴方はどうしたらよかろうと有仰るが。貴方の位置をよくするのには、ここから逃出す一方です。しかしそれは残念ながら無益に帰するので、貴方は到底捉えられずにはおらんです。社会が犯罪人や、精神病者や、総て自分等に都合の悪い人間に対して、自衛を為すのには、どうしたつて勝つことは出来ません。で、貴方の為すべき所は一つです。即ちここにいることが必要であると考えて、安心をしているのみです。』

『いや、誰にもここは必要じゃありません。』

『しかしすでに監獄だとか、瘋癲病院だとかの存在する以上は、誰かその中に入っていねばなりません、貴方でなければ

ば、私わたくし、でなければ、他ほかの者ものが。まあお待ちなさい、左様さよう今いまに遙はるか遠とおき未来みらいに、監獄かんごくだの、瘋癲ふうてん病院びょういんの全ぜん廃はいされた暁あかつきには、即すなわちこの窓まどの鉄格子てつごうしも、この病院びょういん服ふくも、全まったく無用むようになつてしまひましよう、無論むろん、そう云いう時ときは早晩そうばん来きましよう。』

イワン、デミトリチはニヤリと冷笑わらつた。

『そうでしょう。』と、彼かれは眼めを細ほそめて云いうた。『貴方あなただの、貴あなたなたの補助者ほじょしやのニキタなどのような、そう云いう人にんげん間間には、未来みらいなどは何なんの要ようも無ない訳わけです。で、貴方あなたはよい時代じだいが来こようと済すましてもいられるでしょうが、いや、私わたくしの言いうことことは卑いやしいかも知しれません、笑お止かしければお笑わらい下ください。しかしです、新しん生せい活かつの暁あかつきはかがや輝やいて、正せい義ぎが勝かちを制せいするようになれば、我われわれ々の町まちでも大おほまに祭つり

をして喜び祝いましょう。が、私はそれまでは待たれません、その時分にはもう死んでしまいます。誰かの子か孫かは、遂にその時代に遇いましょう。私は誠心を以て彼等を祝します、彼等のためよろこぶに喜びます！ 進め！ 我が同胞！ 神は君等に助を給わん！』と、イワン、デミトリチは眼を輝かして立上り、窓の方に手を伸して云うた。

『この格子の中より君等を祝福せん、正義万歳！ 正義万歳！』

『何をそんなに喜ぶのか私には訳が分りません。』と、院長はイワン、デミトリチの様子がまるで芝居のようだと思ひながら、またその風が酷く気に入って云うた。

『成程、時が来れば監獄や、瘋癲病院は廃されて、正義は貴方の有仰る通り勝を占めるでしょう、しかし生活の實際がそれで変わるものではありません。自然の法則は依然として元のままです、人々はやはり今日こんにちの如く病み、老い、死するのでしよう、どんな立派な生活の暁が顕われたとしても、つまり人間は棺桶かんおけに打込まれて、穴あなの中に投げられてしまうのです。』

『では来世は。』

『何、来世。戯談を云つちやいけません。』

『貴方は信じなさらんと見えるが私は信じてます。ドストエフスキイの中か、ウォルテルの中かに、小説中の人物が云つ

てることがあります、もし神かみが無なかつたとしたら、その時ときは人ひとが
 神かみを考かんえ出だそう。で、私わたくしは堅かたく信しんじています。もし来らい世せいが無ない
 としたならば、その時ときは大おほいなる人にんげん間の智ちえ慧えなるものが、早そうば
 晩ばんこれを発はつ明めいしましよ。』

『フウム、旨うまく言いつた。』

と、アンドレイ、エヒミチはいと満まん足ぞく氣げに微び笑しょうして。

『貴方あなたはそう信しんじていなさるから結けつ構こうだ。そう云いう信しん仰こうがあ
 りさえすれば、たとい壁かべの中なかに塗ぬり込まれたつて、歌うたを歌うたいながら
 生せい活かつして行ゆかれます。貴方あなたは失しつ礼れいながらどこで教き育よくをお
 受うけになつたか？』

『私わたくしは大学だいがくです、しかし卒そつぎ業ぎょうせずに終しまいました。』

『貴方は思想家で考深い方です。貴方のような人はどんな場所しよにいても、自身じしんにおいて安心あんしん心を求めることが出来できます。人じんせ生の解悟かいごに向つておる自由じゆうなる深き思想しそうと、この世よの愚おろかなる騷さわぎに對する全然ぜんぜんの輕蔑けいべつ、これ即ち人間にんげんのこれ以上いじようのものはいまだかつて知らぬ最大さいだい幸福こうふくです。そうして貴方あなたはたとい三重じゆうてつの鉄格子てつこうしの内うちに住すんでいようが、この幸福こうふくをもつていのでありますから。ジオゲンを御覽ごらんなさい、彼は樽かの中なかに住すんでいました、けれども地上ちじようの諸王しよおうより幸福こうふくであつたのです。』
 『貴方あなたの云いうジオゲンは白痴はくちだ。』と、イワン、デミトリチは憂ゆ悶もんして云いうた。『貴方あなたは何なんだつて私わたくしに解悟かいごだとか、何なんだとかと云いうのです。』と、俄にわかに怫然むきになつて立上たちあがつた。『私わたくしは人並ひとなみ

の生活せいかつを好みこのます、実にじつ、私はわたくしこう云いう 窘きんちく逐きよう狂かかに罹かかつてい
て、始終しじゆ苦くるしい恐怖おそれに襲おそわれていますが、或あるとき時はせい生活かつの渴かつほ
望うに心こころを燃もやされるです、非ひじよう常にひと並なみの生活せいを望のぞみます、
非ひじよう常にひじよう、それは非ひじよう常にひじように。』

かれ彼かれは室しつ内ないを歩あるき初はじめたが、やがて小こ声こえでまた言い出だす。
『私は時とき折おり種いろ々いろなことを妄もう想ぞうしますが、往おう々おう 幻まぼろ想しを見み

るので、或あるひと人ひとが来きたり、また人ひとの声こえを聞きいたり、音おん楽がくが聞きこ
えたり、また林はやしや、海かい岸がんを散さん歩ぽしているように思おもわれる時ときもあ
ります。どうぞ私わたくしに世よの中なかの生せい活かつを話はなして下ください、何なにか珍めづらし
いことでも無ないですか。』

『町まちのことをですか、それとも一いっ般ぱんのことに就ついてですか？』

『まず町まちのことからして伺うかがいましょう。それから一般ぱんのことを。』
 『町まちでは実じつにもう退たい屈くつです。誰だれを相手あいてに話はなすものもなし。話はなを聞きく者ものもなし。新あたらしい人間にんげんはなし。しかしこの頃ころハバトフと云いう若わかい医い者しやが町まちには来きたですが。』

『どんな人間にんげんが。』

『いや、極ごくく非ひ文明ぶんめい的てきな、どう云いうものかこの町まちに来くる所ところの者ものは、皆みな、見みるのも胸むねの悪わるいような人間にんげんばかり、不ふ幸こうな町まちです。』
 『左さ様ようさ、不ふ幸こうな町まちです。』と、イワン、デミトリチは溜ため息いきして笑わらう。『しかし一般ぱんにはどうです、新聞しんぶんや、雑誌ざっしはどう云いうことが書かいてありますか？』

病び室しつの中うちはもう暗くらくなったので、院いん長ちやうは静しずかかに立たち上ある。

そうして立ちながら、外国や、露西亞の新聞雑誌に書いてある珍らしいこと、現今はこう云う思想の潮流が認められるとかと話を進めたが、イワン、デミトリチは頗る注意して聞いていた。が忽ち、何か恐しいことでも急に思い出したかのよう、彼は頭を抱えるなり、院長の方へくると背を向けて、寢台の上に横になった。

『どうかしましたか?』と、院長は問う。

『もう貴方には一言だつて口は開きません。』

イワン、デミトリチは素気なく云う。『私に管わんで下さい!』

『どうしたのです?』

『管わんで下さいと云つたら管わんで下さい、チョツ、誰がそん

な者と口を開くものか。』

院長は肩を縮めて溜息をしながら出て行く、そうして玄関の間を通りながら、ニキタに向つて云うた。

『ここ辺を少し掃除したいものだな、ニキタ。酷い臭いだ。』

『拝承まりました。』と、ニキタは答える。

『何と面白い人間だろう。』と、院長は自分の室の方へ帰りながら思つた。『ここへ来てから何年振かで、こう云う共に語られる人間に初めて出会つた。議論も遣る、興味を感じずべきことに、興味をも感じている人間だ。』

彼はその後読書を為す中にも、睡眠に就いてからも、イワン、デミトリチのことが頭から去らず、翌朝眼を覚しても、昨日の智

慧ある人間に遇つたことを忘れることが出来なかつた、便宜もあらばもう一度彼を是非尋ねようと思つていた。

(十)

イワン、デミトリチは昨日と同じ位置に、両手で頭を抱えて、
両足を縮めたまま、横に為つていて、顔は見えぬ。

『や、御機嫌よう、今日は。』院長は六号室へ入つて云うた。『君は眠つて居るのですか？』

『いや私は貴方の朋友じゃ無いです。』と、イワン、デミトリチは枕の中へ顔をいよいよ埋めて云うた。『またどんなに貴方は』

尽じんりよく力ちからしようが駄目だめです、もう一言ごんだつて私わたくしに口くちを開ひらかせるこ
とは出来できません。』

『変へんだ。』と、アンドレイ、エヒミチは氣きを揉もむ。『昨日きのう我われ々
はあんなに話はなしたのですが、何なにを俄にわかに御立腹ごりつぶくで、絶交ぜつこうすると
有おつしや仰おほるのです、何かなにそれとも氣きに障さわることも申もうしましたか、
或あるは貴方あなたの意見いけんと合あわん考かんがえを云い出したので？』

『いや、そんなら貴方あなたに云いみましょう。』と、イワン、デミトリ
チは身みを起おこして、心配しんぱいそうにまた冷笑れいしょう的に、ドクトルを見み
るのであつた。『何なにも貴方あなたは探偵たんていしたり、質問しつもんをしたり、こ
こへ来きてするには当あたらんです。どこへでも他ほかへ行いつてした方がよ
いです。私わたくしはもう昨日きのう貴方あなたが何なんの為ために來きたのかが解わかりましたぞ。』

『これは奇妙な妄想をしたものだ。』と、院長は思わず微笑する。『では貴方は私を探偵だと想像されたのですな。』

『左様。いや探偵にしろ、また私に窃に警察から廻わされた医者にしろ、どちらだつて同様です。』

『いや貴方は。困つたな、まあお聞きなさい。』と、院長は寢台の傍の腰掛に掛けて責るがように首を振る。

『しかし仮りに貴方の云う所が真実として、私が警察から廻された者で、何か貴方の言を抑えようとしているものと仮定しましょう。で、貴方がその為に拘引されて、裁判に渡され、監獄に入れられ、或は懲役にされるとして見て、それがどう

です、この六号室ごうしつにいるのよりも悪いわるでしょうか。ここに入いれられてゐるよりも貴方あなたに取とつてどうでしょうか？ 私わたくしはここよりわるところな悪い所おもは無ないと思おもいます。もしそうならば何なにを貴方あなたはそんなおそに恐おそれなさるのか？』

この言ことばにイワン、デミトリチは大おおに感かん動どうされたと見みえて、彼かれは落おち着ついて腰こしを掛かけた。

時ときは丁ちよう度ど四じ時す過かぎ。いつもなら院いん長ちようは自じ分ぶんの室へやから室へやへあると歩あるいてゐると、ダリュシカが、麦酒ビールは旦だん那な様さま如いか何がですか、と問とう刻こく限げん。戸外こがいは静しずかはれに晴はれ渡わたった天てん気きである。

『私わたくしは中食ちゆうじき後ご散歩さんぽに出掛でかけましたので、ちよつと立寄たちよりましたのです。もうまるまるで春はるです。』

『いまなんがつ
今は何月です、三月でしようか？』

『さよう
左様、三月も末です。』

『そと
戸外は泥濘ぬかつておりましょう。』

『そんなでもありません、庭にわにはもう小径こみちが出来できています。』

『いまごろ
今頃は馬車ばしやにでも乗のつて、郊外こうがいへ行いつたらさぞいいでしょ

う。』と、イワン、デミトリチは赤い眼あかめを擦こすりながら云いう。『そ

うしてそれから家うちの暖あたたかい閑静かんせいな書齋しよさいに帰かえつて……名医めいいいに恃かかつ

て頭痛づつうの療治りようじでもして貰もらったたら、久ひさしい間私あわたくしはもうこの人にんげ

間かんらしい生活せいかつをしないが、それにしてもここは実じつにいやな所ところ

だ。実じつに堪たえられんいやな所ところだ。』

昨日きのうの興奮こうふんの為ためにか、彼かれは疲つかれて脱然ぐつたりして、いやいやなが

ら言いつている。彼かれの指ゆびは顫ふるえている。その顔かおを見みても頭あたまが酷ひどく痛いたんでいると云いうのが解わかる。

『暖あたか閑かん静せいな書しよ斎さいと、この病びよう室しつとの間あいに、何なんの差さも無ないのです。』と、アンドレイ、エヒミチは云いうた。『人にん間の安あん心しんと、満まん足ぞくとは身しん外がいに在あるのではなく、自じ身しんの中うちに在あるのです。』

『どう云いう訳わけで。』

『通つう常じようの人にん間げんは、いいいことも、悪わるいことも皆みな身しん外がいから求もとめます。即すなち馬ば車しゃだとか、書しよ斎さいだとかと、ししかし思し想そう家かは自じ身しんに求もとめるのです。』

『貴あなた方はそんな哲てつ学がくは、暖あたか杏あんのは花はなの香におのする希ギリ臘シヤに行いつて

お伝えなさい、ここではそんな哲学は氣候に合いません。いや
 そうと、私は誰かとジオゲンの話をしましたつけ、貴方とでし
 ろうか?』

『さようきのわたくし
 左様昨日私と。』

『ジオゲンは勿論書齋だとか、暖い住居だとかには頓着
 しませんでした。これは彼の地が暖いからです。樽の中に寝転
 って蜜柑や、橄欖を食べていればそれで過ぎれる。しかし彼を
 して露西亞に住わしめたならば、彼必ず十二月所ではない、三月
 の陽気に成つても、室の内に籠つていたがるでしょう。寒氣の為
 からだなに屈曲つてしまふでしょう。』

『いや寒氣だとか、疼痛だとかは感じないことが出来るです。』

マルク、アウレリイが云ったことがありましよう。「疼痛とは
 とうつう 疼痛の活きた思想である、この思想を変ぜしむるが為には意旨
 ちからふる の力を奮い、しかしてこれを棄てて以て、訴うることを止めよ、
 しからば疼痛は消滅すべし。」と、これはよく言つた語で
 ことば
 す、智者、哲人、もしくは思想家たるものの、他人に異なる所の
 ちしや てつじん たんに ことなところ
 点は、即ちここに在るのでしよう、苦痛を軽んずると云うことに
 てん すなわ あ
 ここにおいてか彼等は常に満足で、何事にもまた驚かぬので
 かれら つね まんぞく なにごと おどろ
 す。』

『では私などは徒に苦み、不満を鳴し、人間の卑劣に驚いたり
 わたくし いたずらくるし ふまん なら にんげん ひれつ おどろ
 ばかりしていませんから、白痴だと有仰るのでしよう。』
 はくち おつしや
 『そうじゃ無いです。貴方もいよいよ深く考慮するように成つた
 な あなた もいよいよ 深く 考 慮る ように 成つた
 な』

ならば、我々の心を動す所の、総ての身外の些細なることは苦にもならぬとお解りになる時がありましよう、人は解悟に向わなければなりません。これが真実の幸福です。』

『解悟……。』イワン、デミトリチは顔を顰める。『外部だとか、内部だとか……。いや私にはそう云うことは少しも解らんです。私わたくしの知しっていることはただこれだけです。』と、彼は立上り、怒おこつた眼めで院いんちよう長ちやうを睨にらみ付つける。『私わたしの知しっているのは、神かみがひとひとねっけつ人を熱ねつ血けつと、神しんけい経けいとより造つくつたと云いうことだけです！ またゆうきてきそしき有機ゆうきてき的てき組くみ織しは、もしそれが生せい活かつ力りよくをもつているとすれば、総すべての刺しげき戟げきに反はん応おうを起おこすべきものである。それで私わたしは反はん応おうしてすべいます。即すなわ疼ちゆう痛つうに對たいしては、絶ぜつ※きようと、涙なみだとを以もつて答こたえ、虚きよぎ偽ぎ

に対しては憤懣を以て、陋劣に対しては厭惡の情を以て答えて
 いるです。私の考ではこれがそもそも生活と名づくべきもの
 だろうと。また有機体が下等に成れば成るだけ、より少く物を
 感ずるのであると、それ故により弱く刺戟に答えるのである。
 で、高等に成れば随てより強き勢力を以て、實際に反
 応するので。貴方は医者でおいでて、どうしてこんな訳がお
 解りにならないです。苦を軽んずるとか、何にでも満足している
 とか、どんなことにも驚かんと云うようになるのには、あれです、
 ああ云う状態になつてしまわなければ。』と、イワン、デミトリ
 ちは隣の油切った彼の動物を差してそう云うた。『或はまた
 苦痛を以て自分を鍛練して、それに対しての感覚をまるで失

つてしまふ、言を換えて言えば、生活を止めてしまふようなこと
 とに至らしめなければならぬのです。私は無論哲人でも、哲
 学者でも無いのですから。』と、更に激して。『ですから、こ
 んなことに就いては何にも解らんです。議論する力が無いので
 す。』

『どうしてなかなか、貴方は立派に議論なさるです。』

『貴方が例証に引きなすつたストア派の哲学者等は立派な
 人達です。しかしながら彼等の学説はすでに二千年以前に
 廃れてしまいました、もう一歩も進まんのです、これから先、ま
 た進歩することは無い。如何となればこれは現実的でない、活
 動的で無いからである。こう云う学説は、ただ種々の学説

を集めて研究したり、比較したりして、これを自分の生じぶんしょうが

 涯いの目的もくてきとしている、極めて少数しょうすうの人ひとばかりに行おこなわれて、

 他の多数たすうの者ものはそれを了解りようかいしなかつたのです。苦痛くつうを軽蔑けいべつ

 すると云いうことは、多数たすうの人ひとに取とつたならば、即すなわち生活せいかつその物もの

 を軽蔑けいべつすると云いうことになる。如何いかんとなれば、人間にんげん全体ぜんたいは、

 餓うえだとか、寒さむさだとか、凌辱はざかしめだとか、損失そんしつだとか、死しに対たいす

 るハムレット的てきの恐怖おそれなどの感かん覚かくから成なり立たつていいるのです。こ

 の感かん覚かくの中うちにおいて人じん生せい全ぜん体たいが含ふまくつていいるのです。これ

 を苦くにするここと、悪にくむこことは出で来きます。が、これこれを軽けい蔑べつするこ

 とは出で来きんです。であるから、ストア派はの哲て学がく者しゃは未み来らいをもつ

 ことこが出で来きんです。御ご覧らんなさい、世せ界かいの始はじめから、今こん日にちにいた

まで、ますます進歩しんぽして行くものは生存せいぞん競争きょうそう、疼痛とうつうの感かん

 覚かく、刺戟しげきに対たいする反はん応おうの力ちからなどでしよう。』と、イワン、デ

 ミトリチは俄にわかに思想しそうの連れん絡らくを失うしなつて、残ざん念ねんそうに額ひたいを擦こすつた。

 『何なにか肝かん心じんなことを云いおうと思おもつて出でなくなつた。』

 と、彼かれは続つづける。『それじや基ハリストス督くでも例れいに引ひきましよう、基ハ

 リストス督くは泣ないたり、微び笑しょうしたり、悲かなんだり、怒おこつたり、憂うれいに沈しず

 んだりして、現げん実じつに対たいして反はん応おうしていたのです。彼かれは微び笑しょう

もつくるしみむか
 を以もつて苦くるに対たいわなかつた、死しを輕けい蔑べつしませんでした、却かえつて

 「この杯さかずきを我われより去さらしめよ」と云いうて、ゲフシマニヤの園そので祈き

 禱とうしました。』

イワン、デミトリチはかく云いつて笑わらい出だしながら坐すわる。

『で仮りに人間の満足と安心とが、その身外に在るに非らずして、自身の内に在るとして、また仮りに苦痛を軽蔑して、何事にも驚かぬようにしなければならぬとして、見て、第一貴方自身は何に基いて、こんなことを主張なさるのか、貴方は一体哲人ですか、哲学者ですか？』

『いや私は哲学者でも何でも無い。が、これを主張するのは、大に各人の義務だろうと思うのです、これは道理のあることで。』

『いや私の知ろうと思うのは、何の為に貴方が解悟だの、苦痛だの、それに対する軽蔑だの、その他のことに就いて自ら精通家と認めてお出なのですか。貴方は何時にか苦んだことでもあ

るのですか、苦しみと云うことの理解をもつてお出でですか、或は失礼ながら貴方はお幼少時分、打擲でもなされましたことがおありなのですか？」

『否、私の両親は、身体上の処刑は非常に嫌つていたのです。』

『わたくしちちは酷く仕置をされました。私の父は極く苛酷な官員であつたのです。が、貴方のことを申して見ましようかな。貴方は一生涯誰にも苛責されたことは無く、健康なること牛のごとく、嚴父の保護の下に生長し、それで学問させられ、それからして割のよい役に取付き、二十年以上の間も、暖炉も焚いてあり、灯も明るき無料の官宅に、奴婢をさえ使つて住ん

で、その上、仕事は自分の思うまま、してもしないでも済んでい
 ると云う位置。で、生来貴方は怠惰者で、嚴格で無い人
 間、それ故貴方は何んでも自分に面倒でないよう、働かなく
 とも済むようとはばかり心掛けています、事業は代診や、その
 他のやくぎものに任せ切り、そうして自分は暖い静な処に坐して、
 金を溜め、書物を読み、種々な屁理窟を考え、また酒を（彼は
 院長の赤い鼻を見て）呑んだりして、楽隠居のような真似
 をしている。一言で云えば、貴方は生活と云うものを見ないの
 です、それを全く知らんのです。そうして實際と云うことをた
 だ理論の上からばかり推している。だから苦痛を軽蔑したり、
 何事にも驚かんなどと云っていられる。それは甚だ単純な

原因げんいんに由よるのです。「空くうの空くう」だとか、内部ないぶだとか、外部がいぶだとか、苦痛くつうや、死しに對たいする輕蔑けいべつだとか、眞正しんせいなる幸福こうふくだとか、とこんな言草いいくさは、皆みな口シヤの怠惰なまけもの者に適てきとう当とうしている哲学てつがくです。で、貴方あなたはこうなのだ、まず齒はが痛いたむと云いう農婦のうふが來くる：と、それがどうしたのだ。疼痛とうつうは疼痛とうつうのことの思想しそつうである。かつまた、病氣びようきが無なくてはこの世よに生いきて行ゆく訳わけには行ゆかぬものだ。早はやく歸かえるべし。俺おれの思想しそつうとヴオツカを吞のむ邪魔じやまをするな。とこう云いうでしよう。また或若者あるわかものが來きてどう云いう風ふうに生せい活かつをしたらいいかと相談そうだんを掛かけられる、と、他人たにんはまず一ぱん番考がえる所ところであろうが、貴方あなたにはその答こたえはもうちやんと出來できている。解悟かいごに向むかいなさい、眞正しんせいの幸福こうふくに向むかいなさい。とこう云いうです。

われわれ 我々をこんな格子の内に監禁して置いて苦しめて、そうして
 これは立派なことだ、理窟のあることだ、いかんとなればこの病
 室と、暖なる書齋との間に何の差別もない。と、誠に都合
 のいい哲学です。そうして自分を哲人と感じている……いや貴
 方これはです、哲学でもなければ、思想でもなし、見解の敢
 て広いのでも無い、怠惰です。自滅です！ 睡魔です！ 左様！』
 と、イワン、デミトリチは昂然として『貴方は苦痛を軽蔑な
 さるが、試に貴方の指一本でも戸に挟んで御覧なさい、そうした
 ら声限り※ぶでしよう。』
 『或は※ばんかも知れません。』と、アンドレイ、エヒミチは言
 う。

『そんなことは無い、例えば御覽なさい、貴方が中風にでも罹つたとか、或は仮に愚者が自分の位置を利用して貴方を公然辱しめて置いて、それが後に何の報も無しに済んでしまったのを知つたならば、その時貴方は他の人に、解悟に向いなさいとか、眞正の幸福に向いなさいとか云うことの効力が果して、何程と云うことが解りましょう。』

『これは奇抜だ。』と院長は満足の余り微笑しながら、両手を擦り擦り云う。『私は貴方が総てを綜合する傾向をもっているのを、面白く感じかつ敬服致したのです、また貴方が今述べられた私の人物評は、ただ感心する外はありません。実は私は貴方との談話において、この上も無い満足を得

ましたのです。で、私は貴方のお話を不残伺いましたから、こ
 んどはどうぞ私の話をもお聞き下さい。』

(十一)

かくて後、なお二人の話は一時間も続いたが、それより院
 長は深く感動して、毎日、毎晩のように六号室に行く
 のであつた。二人は話込んでいる中に日も暮れてしまうことが
 ままある位。イワン、デミトリチは初めの中は院長が野心で
 もあるのでは無いかと疑つて、彼にとかく遠ざかつて、不愛想
 にしていたが、段々慣れて、遂には全く素振を変えたのであつ

た。

しかるに病院びょういんのうちでは院長いんちやうアンドレイ、エヒミチが六号室ごうしつに切しきりに通かよいだしたのを怪あやしんで、その評ひやうばん判たかが高たかくなり、代診だいしんも、看護婦かんごふも、一様ように何なんの為ために行くのか、何なんで数時間すうじかん余よもあんな処ところにいるのか、どんな話はなしをするのであろうか、彼かれ処こへ行いつても処方書しよほうがきを示しめさぬでは無ないかと、彼方あつちでも、此方こつちでも、彼かれが近頃ちかごろの奇きなる挙動きよどうの評判ひやうばんで持切もちきつている始末しまつ。ミハイル、アウエリヤヌイチはこの頃ごろでは始終しじゆ彼の留守るすにばかり行ゆく。ダリユシカは旦那だんなが近頃ちかごろは定刻ていこくに麦酒ビールの吞のまず、中ちゆう食じきまでも晩おくれることが度々たびたびなので困却こまつている。

或時あるとき六月がつの末すえ、ドクトル、ハバトフは、院いんちやう長ちやうに用事ようじがあ

つて、その室へやに行つた所ところ、おらぬので庭にわへと探さがしに出た。するとそこで院いんちよう長ちやうは六号室ごうしつであると聞きき、庭にわから直すぐに別室べつしつに入り、玄関げんかんの間に立たちとどま留まると、丁度ちやうどこう云いう話はなし声こゑが聞きこえたので。

『我々われわれは到底とうてい合奏がっそうは出来できません、私わたくしを貴方あなたの信しん仰こうに帰きせしむる訳わけには行きませんから。』

と、イワン、デミトリチの声こゑ。

『現実げんじつと云いうことは全まったく貴方あなたには解わからんのです、貴方あなたはいまだかつて苦くるんだことは無ないのですから。しかし私わたくしは生うまれたその日ひより今こん日にちまで、絶たえず苦痛くつうを嘗なめているのです、それ故ゆゑ私わたくしは自分じぶんを貴方あなたよりも高たかいもの、万事ばんじにおいて、より多おほく精せい通つうしている

ものと認めておるです。ですから貴方が私に教えると云う場合で

無いのです。』

『私は何も貴方を自分の信仰に向わせようと云う権利を主

張はせんのです。』院長は自分を解つてくれ人の無いので、

さも残念と云うように。『そう云う訳では無いのです、それは

貴方が苦痛を嘗めて、私が嘗めないということではないのです。

詮ずる所、苦痛も快樂も移行行くもので、そんなことはどうで

もいいのです。で、私が言おうと思ふのは、貴方と私とが思想す

るもの、相共に思想したり、議論をしたりする力があるものと

認めているということ。たとい我々の意見が何の位違つて

も、ここに我々の一致する所があるのです。貴方がもし私が一

般ばんの無む智ちや、無む能のうや、愚ぐ鈍どんを何どれ程ほどに厭いとうておるかかと知しつて下くだす
 つたならば、また如何いかなる喜よろこびももつて、こうして貴方あなたと話はなしをしてい
 るかかと云いうことことを知しつて下くだすつたならば！ 貴方あなたは知ち識しきのある人ひと
 です。』

ハバトフはこの時とき少こしばかり戸とを開あけて室しつ内ないを覗のぞいた。イワン、
 デミトリチは頭ずきん巾かぶを被かつて、妙みような眼め付つきをしたり、顫ふる上あがつたり、神し
 經んけいてき びびよういんふく 院いん 服ちようのまええを合あわしたりしている。院いん 長ちようはその
 側そばに腰こしを掛かけて、頭かしらを垂たれて、じつとして心こころ細ほそいような、悲かな
 しいような様子ようすで顔かおを赤あかくしている。ハバトフは肩かたを縮ちぢめて冷れい
 笑ようし、ニキタと見み合あう。ニキタも同おなじく肩かたを縮ちぢめる。

翌よく日じつハバトフは代だい診しんを伴つれて別べつ室しつに來きて、玄げん関かんの間まで

「たちぎぎまたも立聞。」

『いんちようどの院長殿、とうとうはつきよう発狂と御坐ったわい。』と、ハバト

フは別室べっしつを出ながらでの話。はなし

『しあわれめ主憐よ、しあわれめ主憐よ、しあわれめ主憐よ!』と、けいけん敬虔なるセルゲイ、セルゲ

イチは云いいながら。ピカピカと磨みがきあ上げた靴くつを汚よごすまいと、庭にわの

みずたまり水溜よを避よけ避よけ溜息ためいきをする。

『うちあ打明けて申もうしますとな、エウゲニイ、フエオドロイチわたくしもう私わたしは

疾とうからこんなことになりはせんかと思おもつていましたのさ。』

(十二)

その後院長アンドレイ、エヒミチは自分の周囲の者の様子の、ガラリと変わったことを漸く認めた。小使、看護婦、患者等は、彼に往遇う度に、何をか問うものの如き眼付で見る、行き過ぎてからは私語く。折々庭で遇う會計係の小娘の、彼が愛していた所のマアシャは、この節は彼が微笑して頭でも撫でようとする、急いで遁出す。郵便局長のミハイル、アウエリヤヌイチは、彼の所に來て、彼の話を聞いてはいるが、先のようにそれは眞実ですとはもう云わぬ。何となく心配する顔で、左様々々、左様、と、打湿つて云つてるかと思つと、やれヴオツカを止せの、麦酒を止めろのと勸初める。また医員のハバトフも時々來ては、何故かアルコール分子の入っている飲

みもの物を止せ。ブローミウム加里を服めと勧めて行くので。

八月にアンドレイ、エヒミチは市役所から、少し相談があ

るに由つて、出頭を願うと云う招状があつた、で、定

刻に市役所に行つて見ると、もう地方軍令部長を初め、

郡立学校視学官市役所員、それにドクトル、ハバトフ、ま

たも一人の見知らぬブロンジンの男、ずらりと並んで控えている。

傍にいた者は直ぐに院長にこの人間を紹介した、やは

りドクトルで、何だとかと云うポーランドの云い悪い名、この町

から三十ヴェルスタばかり隔っている、或る育馬所にいる者、

今日この町を何かの用でちよつと通掛つたので、この場所へ

立寄つたとのこと。

『ええ、只今、足下に御関係のある事柄で、申上げたいとおも

思うのですが。』と、市役所員は居並ぶ人々の挨拶が済むところ切り出した。『あ、エウゲニイ、フェオドロイチの有仰るには、本院の薬局が狭隘ので、これを別室の一つに移転してはどうかと云うのです。勿論これは雑作も無いことです。』

が、それには別室の修繕を要すると云うそのことです。』

『左様、修繕を致さなければならんでしよう。』と、院長は考えながら云う。『例えば隅の別室を薬局に当てようと云うには、私の考では、極く少額に見積つても五百円は入りましよう、しかし余り不生産的な費用です。』

みな皆はすこし黙している。院長は静にまた続ける。

『私わたくしはもう十年ねんも前からまえ、そう申もうしあ上げていたのですが、全体ぜんたいこの病びょういん院いんの設立たてられたのは、四十年ねんだい代の頃ころでしたが、その時じぶん分ぶんは今こん日にちのような資しりよく力りきでは無なかつたもので。しかし今こん日にちの所ところでは病びょういん院いんは、確たしかに市ちの資ちから力いじよう以上いじようの贅ぜいたく沢たくに為なっているので、余よけい計けいな建たて物もの、余よけい計けいな役やくなどで随ずいぶん分ぶん費用ひようも多おほく費つかつてい

るので、私わたくしの思おもうには、これだけの錢ぜにを費つかうのなら、遣やり方かたをさえ換かえれば、こここゝに二ふたつの模も範はん的てきの病びょういん院いんを維い持じすることことが出来できると思おもいます。』

『では一いっつ遣やり方かたを換かえて御ご覧らんになつたら如何いかにです。』

と、市し役やく所しょ員いんは活かつ発ぱつに云いう。

『私わたくしは前まえにも申もうしあげました通りとおり、医い学がく上じようの事じ務むを地ち方ほう自じ治ち体たいの方ほう

へ、お渡しわたしになつてはどうでしょう？』

『地方自治ちほうじちに銭ぜにを渡しわたしたら、それこそ彼等かれらは皆盗みなぬすんでしまいましよう。』と、ブロンジンのドクトルは笑い出だす。

『そりや極きまつてます。』と、市役所員しやくしょいんも同意どういして笑わらう。

院いんちよう長ちやうは茫然ぼんやりとブロンジンのドクトルを見みたが。『しかし

公平こうへいに考かんがえなければなりません。』と云いうた。

皆みなはまたしばし黙もくしてしまふ。その中うちに茶ちやが出でる。ドクトル、

ハバトフは皆みなとの一般ぱんの話はなしの中うちも、院いんちよう長ちやうの言ことばに注ちゆう意いをして

聞きいていたが突だ然しぬけに。『アンドレイ、エヒミチ今日きようは何なん日にちで

す？』それから続つづいて、ハバトフとブロンジンのドクトルとは下へ

手たななのを感かんじている試しけん験かん官かんと云いつたような調ちやう子しで、今日きようは何な

んようび
 曜日だとか、一年ねんうちの中には何日なんにちあるとか、六号室ごうしつには面おもし
 白しろい予言者よげんしゃがいるそうなどかと、交々かわるがわるたず尋問じんもんねるのであつ
 た。

いんちよう
 院長いんちようは終おわりの間といには赤面せきめんして。『いや、あれは病人びょうにんで
 す、しかし面白おもしろい若者わかもので。』と答こたえた。

もう誰たれも何なんとも質問しつもんをせぬのである。

いんちよう
 院長いんちようは玄関げんかんの間まで外套がいとうを着き、市役所しやくしよの門もんを出でたが、
 これは自分じぶんの才能さいのうを試験しけんする所ところの委員会いいんかいであつたと初めてはじて悟さと
 り、自分じぶんに懸かけられた質問しつもんを思おもひ出だし、一人ひと自みづから赤面せきめんし、一
 生しょうの中今初うちまはめて、医学いがくなるものを、つくづく情無なさけない者ものに感かんじ
 たのである。

その晩、郵便局長のミハイル、アウエリヤヌイチは彼の所に來たが、挨拶もせずいきなり彼の両手を握つて、声を顫わして云うた。

『おお君、ねえ、君は僕の切なる意中を信じて、僕を親友と認めてくれることを証して下さるでしようね……え、君！』

彼は院長の云わんとするのを遮つて、何かそわそわして続

けて云う。『私は貴方の教育と、高尚なる心とを甚だ敬

愛しておるです。どうぞ君、私の云うことを聞いて下さい。医

学の原則は、医者等をして貴方に実を云わしめたのです。しか

しながら私は軍人風に真向に切出します。貴方に打明けて云

います、即ち貴方は病氣なのです。これはもう周囲の者の疾う

より認めて^{みと}いる所^{ところ}で、只^{ただ}今^{いま}もドクトル、エウゲニイ、フエオド
 ロイチが云^いうのには、貴方^{あなた}の健康^{けんこう}の為^{ため}には、須^すく気晴^{きばらし}をして、
 保養^{ほよう}を専^{せん}一^{せん}とせんければならんと。これは実^{じつ}際^{さい}です。所^{ところ}が、丁^ち
 度^{よう}私^{わたし}もこの節^{せつ}、暇^{ひま}を貰^{もら}つて、異^{かわ}つた空^{くう}氣^きを吸^すいに出掛^{でか}けよう
 思^{おも}つている矢^や先^{さき}、どうでしょう、一所^{しょ}に付合^{つきあ}つては下^{くだ}さらんか、
 そうして旧^{ふるい}事^{こと}を皆忘^{みんな}れてしま^{わす}いましょうじやありませんか。』
 『しかし私^{わたし}は少^{すこ}しも身体^{からだ}に異^{いじよう}状^{じよう}は無^ないです、壮健^{そうけん}です。無暗^{むやみ}
 に出掛^{でか}けることは出来^{でき}ません、どうぞ私^{わたし}の友^{ゆう}情^{じよう}を他^たのこ^{こと}で
 何^{なん}とか証^{しょう}させて下^{くだ}さい。』

アンドレイ、エヒミチは初^{はじめ}の一分^{ぷんじ}時は、何^{なん}の意味^{いみ}もなく書物^{しょもつ}
 と離^{はな}れ、ダリユシカと麦酒^{ビール}とに別^{わか}れて、二十年^{ねんらいさだ}来定^{らいさだ}まったその

せいかつ 生活の順序じゆんじよを破やぶると云いうことは出来できなく思おもうたが、また深ふかく思おもえば、市役所しやくしよでありしこと、その自みら感かんじた不愉快ふゆかいのこと、おろかひとびとが自じぶん分ぶんを狂人きやうじん視ししているこんな町まちから、少すこしでも出でて見みたらば、とも思おもうのであつた。

『しかし貴方あなたは一体たいどこへお出掛でかけになろうと云いうのです？』院いん長ちやうは問とうた。

『モスクワへも、ペテルブルグへも、ワルシヤワへも……ワルシヤワは実じつによい所ところです、私わたしが幸福こうふくの五年ねんかん間かんは彼処あそこで送おくつたのでした、それはいい町まちです、是非ぜひ行ゆきましょう、ねえ君きみ。』

(十三)

一週間しゅうかんを経てアンドレイ、エヒミチは、病院びょういんから辞じしよ
 職くの勧告かんこくを受けたが、彼はかれそれに対してたいは至いたつて平氣へいきであつ
 た。かくてまた一週間しゅうかんを過ぎ、遂ついにミハイル、アウエリヤ又
 イチと共に郵便ゆうびんの旅馬車たびばしやに打乗うちのり、近ちかき鉄道のステーション
 を差さして、旅行りょこうにと出掛でかけたのである。
 空そらは爽さわやかに晴はれて、遠とおく木立こだちの空そらに接せつする辺あたりも見渡みわたされる涼すずしい
 日和ひより。ステーションまでの二百ヴェルスタの道みちを二昼夜ちゅうやで過すぎ
 たが、その間馬あいだまの継場つぎば々々で、ミハイル、アウエリヤ又イチは、
 やれ、茶ちやの杯こつぷの洗あらいようがどうだとか、馬うまを附つけるのに手間てまが取と
 れるとかと力りきんで、上句あげくには、何いっも黙だまれとか、彼かれこれ云いうな、

とかと真赤まっかになつて騒さわぎを返かえす。道々みちみちも一分ぶんの絶間たえまもなく喋しゃべり続つづ

けて、カフカズ、ポーランドを旅行りょこうしたことなどを話はなす。そう

して大おお声ごえで眼めを剥むきだし、夢中むちゆうになつてドクトルの顔かおへはふツ

はふツと息いきを吐ふつかけ、耳許みみもとで高たか笑わらいする。ドクトルはそれ

が為ために考かんがへふけに耽たることもならず、思おもいに沈しずむことも出来できぬ。

汽車きしやは経けい済さいの為ために三等とうで、喫烟きつえんをせぬ客車かくしやで行いつた。車し

室やしつの中うちはさのみ不潔ふけつの人間にんげんばかりではなかつたが、ミハイル、

アウエリヤヌイチは直すぐに人々ひとびとと懇意こんいになつて誰たれにでも話はなを仕掛しか

け、腰掛こしかけから腰掛こしかけへ廻まわり歩いて、大おお声ごえで、こんな不都合ふつぎあつ極ま

る汽車きしやは無ないとか、皆盗人みなぬすびとのような奴等やつらばかりだとか、乗馬じようば

で行ゆけば一日いちにちに百ヴェルスタも飛とばせて、その上愉快うえゆかいに感かんじられ

るとか、我々の地方の不作なのはピン沼などを枯してしまつたからだ、非常な乱暴をしたものだとか、などと云つて、殆ど他には口も開かせぬ、そうしてその相間には高笑と、仰

山な身振。

『私等二人の中、何れが瘋癲者だろうか。』と、ドクトルは腹立しくなつて思つた。『少しも乗客を煩わさんように務めてゐる俺か、それともこんな一人で大騒をしてゐた、誰にも休息もさせぬこの利己主義男か?』

モスクワへ行つてから、ミハイル、アウエリヤヌイチは肩章の無い軍服に、赤線の入つたズボンを穿いて町を歩くにも、軍帽を被り、軍人の外套を着た。兵卒は彼を見て敬

礼いれいをする。アンドレイ、エヒミチは今初めていま気が着いたが、ミ
 ハイル、アウエリヤヌイチは前に大地主おおじぬしであつた時の、余り感あま
 心んしんせぬ風ふうばかりが今も残のこつていと云うことを。机つくえの前にマツ
 チはあつて、彼はそれを見みていながら、その癖くせ、大おお声を上あげて
 小使こづかいを呼よんでマツチを持もつて来こいなどと云いい、女じよちゆう中ちゆうのいる
 前まえでも平気へいきで下着したぎ一つで歩あるいている、下僕しもべや、小使こづかいを捉つかまえては、
 年としを寄とつたものでも何なんでも構かまわず、貴様きさま々々さまと頭あたま碎こなし。その上うえ
 に腹はらを立たつと直すぐに、この野郎やろう、この大馬鹿おおぼかと悪あく体たいが初はじまるの
 で、これらは大地主おおじぬしの癖くせであるが、余あまり感かん心しんした風ふうでは無ない、
 とドクトルも思おもうたのであつた。

モスクワ見物けんぶつの第一着だいちやくに、ミハイル、アウエリヤヌイチはそ

の友をまずイウエルスカヤ小聖堂に伴れ行き、そこで彼は熱心に伏拝して涙を流して祈禱する、そうして立上り、深く溜息して云うには。

『たとい信じなくとも、祈禱をすると、何とも云われん位、心が安まる、君、接吻し給え。』

アンドレイ、エヒミチは体裁悪く思いながら、聖像に接吻した。ミハイル、アウエリヤヌイチは唇を突出して、頭を振りながら、またも小声で祈禱して涙を流している。それから二人はそこを出て、クレムリに行き、大砲王（巨大な砲）と大鐘王（巨大な鐘、モスクワの二大名物）とを見物し、指で触つて見たりした。それよりモスクワ川向の町の景色などを見渡

しながら、救世主の聖堂や、ルミヤンツセフの美術館な
 んどを廻つて見た。

中食はテストフ亭と云う料理店に入つたが、ここでもミ
 ハイル、アウエリヤヌイチは、頬鬚を撫でながら、ややしばら
 く、品書を拈転つて、料理店を我が家のように挙動う愛食
 家風の調子で。

『今日はどんな御馳走で我々を食わしてくれるか。』と、無暗
 と幅を利かせたがる。

(十四)

ドクトルは見物けんぶつもし、歩いて見みるても見み、食くつても飲のんでも見みたの
 であるが、ただもう毎まい日にちミハイル、アウエリヤヌイチの挙動きよどう
 に弱よわらされ、それが鼻はなに着ついて、嫌いやで、嫌いやでならぬので、どうか
 して一日いちにちでも、一時ときでも、彼かれから離はなれて見みたく思おもうのであつたが、
とも友じぶんは自分かれより彼ほを一步はなでも離はなすことはなく、何なんでも彼かれの氣晴きばらしを
 するが義務ぎむと、見物けんぶつに出でぬ時ときは饒舌しゃべり続つづけて慰なぐさめようと、附つきま
と纏どおい通ありさましの有ありさま様さま。二日かと云いうものアンドレイ、エヒミチは堪こら
こらえ堪こらえて、我慢がまんをしていたのであるが、三日目かめにはもうどうにも
こら堪きえ切れず。少すこし身からだ体の工ぐ合あいが悪わるいから、今日きようだけ宿やどに残のこつてい
 ると、遂ついに思おも切いきつて友ともに云いうたのであつた、しかるにミハイル、
 アウエリヤヌイチは、それじや自分じぶんも家いえにいることにしよう、少すこ

しは休息きゆうそくもしなければ足あしも続つづかぬからと云いう挨拶あいさつ。アンドレイ、
 エヒミチはうんざりして、長椅子ながいすの上に横よこになり、倚より掛かかりの方ほう
 へ突つと顔かおを向むけたまま、齒はを切いつて、友ともの喋べらべら喋しゃべ語るのを詮せん方かた
 なく聞きいている。さりとも知らぬミハイル、アウエリヤヌイチは、
 大得意だいたくで、仏蘭西フランスは早晩そうばん独逸ドイツを破やぶつてしまふだろうとか、モ
 スクワには攫客すりお客が多いとか、馬うまは見掛みかけばかりでは、その真価しんかは解わか
 らぬものであるとか。と、それからそれへと話はなしを続つづけて息いきの継つぐ
 暇ひまも無い、ドクトルは耳みみをガンとして、心臓しんぞうの鼓動こどうさえ烈はげしく
 なつて来くる。と云いつて、出でて行いつてくれ、黙だまつていてくれとは彼かれ
 には言いわれぬので、じつと辛抱しんぼうしている辛つらさは一ばい倍ばいである。所ところ
 が仕合しあわせにもミハイル、アウエリヤヌイチの方が、こんどは宿やどに

ひっこ引込んでいるのが、とうとう退屈たいくつになつて来て、中食後ちゆうじきごには散歩さんぽにと出掛でかけて行いつた。

アンドレイ、エヒミチはやつと一人ひとりになつて、長椅子ながいすの上うえにの

ろのろと落着おちついて横よこになる。室内しつないに自分じぶんただ一人ひとり、と意識いしきする

のは如何いかに愉快ゆかいであつたらう。真実しんじつの幸福こうふくは実じつに一人ひとりでなけれ

ば得うべからざるものであると、つくづく思おもうた。そうして彼かれは此こ

頃のころ見みたり、聞きいたりしたことを考かんえようと思おもうたが、どうした

ものかやはり、ミハイル、アウエリヤヌイチが頭あたまから離はなれぬので

あつた。

その後のちは彼かれは少すこしも外がい出しゅつせず、宿やどにばかり引込ひっこんでいた。

友ともはわざわざ休きゆう暇かを取とつて、かく自分じぶんと共ともに出しゅつ発ぱつしたの

では無いか。深き友情によつてでは無いか、親切なのでは無いか。しかし実にこれ程有難迷惑のことがまたとあろうか。降参だ、真平だ。とは云え、彼に悪意があるのでは無い。と、ドクトルは更にまたしみじみと思つたのであつた。

ペテルブルグに行つてからもドクトルはやはり同様、宿にのみ引籠つて外へは出ず、一日長椅子の上に横になり、麦酒を呑む時にだけ起る。

ミハイル、アウエリヤヌイチは、始終ワルシヤワへ早く行こうとばかり云うている。

『しかし君、私は何もワルシヤワへ行く必要は無いのだから、君一人で行き給え、そうして私をどうぞ先に故郷に帰して下さ

い。』アンドレイ、エヒミチは哀願するように云うた。

『飛だことさ。』と、ミハイル、アウエリヤヌイチは聴入れぬ。

『ワルシヤワこそ君に見せにやならん、僕が五年の幸福な生涯を送つた所だ。』

アンドレイ、エヒミチは例の気質で、それでもとは云い兼ね、

遂にまた嫌々ながらワルシヤワにも行つた。そこでも彼は宿か

ら出ずに、終日相変らず長椅子の上に転がり、相変らず

友の挙動に愛想を尽かしている。ミハイル、アウエリヤヌイ

チは一人して元気よく、朝から晩まで町を遊び歩き、旧友を

尋ね廻り、宿には数度も帰らぬ夜があつた位と、或朝早く非

常に興奮した様子で、真赤な顔をし、髪も茫々として宿に

帰かえつて来たき。そうして何なにか独ひとりごと語ことしながら、室しつない内ないを隅すみから隅すみへと急いそいで歩あるく。

『名めいよ誉よは大事だいじだ。』

『そうだ名めいよ誉よが大たい切せつだ。全ぜん体たいこんな町まちに足あしを踏ふみこんだのが間ま違ちがいだつた。』と、彼かれは更さらにドクトルに向むかつて云いうた。『実じつは私わたしは負まけたのです。で、どうでしょう、錢ぜにを五えん百か円か貸かしては下くださらんか？』

アンドレイ、エヒミチは錢ぜにを勘かんじよう定じようして、五えん百か円かを無むごん言ごんで友ともに渡わたしたのである。ミハイル、アウエリヤヌイチはまだ真ま赤かになつて、面めん目ぼくな無ないような、怒おこつたような風ふうで。『きつと返かえ却せします、きつと。』などと誓ちかいながら、また帽ぼうを取とるなり出でて行いつた。

が、大約二時間を経つてから帰つて来た。

『お蔭で名誉は助かった。もう出発しましょう。こんな不徳義極る所に一分だつて留つていられるものか。掏摸ども奴、塙探ども奴。』

二人が旅行を終えて帰つて来たのは十一月、町にはもう深雪が真白に積つていた。アンドレイ、エヒミチは帰つて見れば自分の位置は今ではドクトル、ハバトフの手に渡つて、病院の官宅を早く明渡すのをハバトフは待つているというとのこと、またその下女と名づけていた醜婦は、この間から、別室の内のある処に移転した。町には、病院の新院長に就いての種々な噂が立てられていた。下女と云う醜婦が会計と喧嘩

をしたとか、會計はその女の前に膝を折つて謝罪したとか、と。

アンドレイ、エヒミチは帰来早々まずその住居を尋ねねばならぬ。

『不遠慮な御質問ですがなあ君。』と郵便局長はアンドレイ、エヒミチに向つて云うた。

『貴方は何位財産をお所有ちですか？』

と問われて、アンドレイ、エヒミチは黙したまま、財囊の錢を数え見て。『八十六円。』

『否、そうじゃないのです。』ミハイル、アウエリヤヌイチは更に云直す。『その、君の財産は総計で何位と云うのを』

伺^{うかが}うのさ。』

『だから総^{そうけい}計^{けい}八十六円^{えん}と申^{もう}しているのです。それ切^ぎり私^{わたし}は一文^{もん}も所有^もつちやおらんです。』

ミハイル、アウエリヤヌイチはドクトルの廉^{れん}潔^{けつ}で、正^{しょう}直^{じき}であるのは予^{かね}ても知^しっていたが、しかしそれにしても、二万^{ふた}円^{まん}位^いは確^{たしか}に所有^{もつ}ていることとのみ思^{おも}うていたのに、かくと聞^きいては、ドクトルがまるで乞^{こじき}食^{じき}にも等^{ひと}しき境^{きよう}遇^{ぐう}と、思^{おも}わず涙^{なみだ}を落^{おと}して、ドクトルを抱^{いだ}き締^しめ、声^{こえ}を上げ^あげて泣^なくのであつた。

(十五)

ドクトル、アンドレイ、エヒミチはベローワと云う婦の小汚な
 い家の一間を借りることになった。彼は前のように八時に起きて、
 茶の後は直に書物を楽しんで読んでいたが、この頃は新しい書
 物も買えぬので、古本ばかり読んでいる為か、以前程には
 興味を感じぬ。或時徒然なるに任せて、書物の明細な
 目録を編成し、書物の背には札を一々貼付けたが、こんな
 機械的な単調な仕事か、却つて何故か奇妙に彼の思想を
 弄して、興味をさえ添えしめていた。

彼はその後病院に二度イワン、デミトリチを尋ねたのであ
 るがイワン、デミトリチは二度ながら非常に興奮して、激
 昂していた様子で、饒舌することはもう飽きたと云つて彼を拒絶

する。彼は詮方なくお眠みなさい、とか、左様なら、とか云

つて出て来ようとすれば、『勝手にしやがれ。』と怒鳴り付ける

権幕。ドクトルもそれから行くのを見合わせてはいるものの、

やはり行きたく思っていた。

前には彼は中食後は、きつと室の隅から隅へと歩いて考えに

沈んでいるのが常であつたが、この頃は中食から晩の茶の時

までは、長椅子の上に横になる。と、いつも妙な一つ思想が胸に

浮ぶ。それは自分が二十年以上も勤務をしていたのに、それに

対して養老金も、一時金もくれぬことで、彼はそれを思うと残

念であつた。勿論余り正直には務めなかつたが、年金

など云うものは、たとい、正直であろうが、無かろうが、凡

て務めた者は受けべきである。勲章だとか、養老金だとか
 云うものは、徳義上の資格や、才能などに報酬されるの
 ではなく、一般に勤務その物に対して報酬されるのである。
 しからば何で自分ばかり報酬をされぬのであろう。また今
 更考えれば旅行に由りて、無惨々々と惜ら千円を費い棄てた
 のはいかにも残念。酒店には麦酒の払が三十二円も滞る、家賃
 とでもその通り、ダリユシカは密に古服やら、書物などを売
 っている。此際彼の千円でもあつたなら、どんなに役に立つこ
 とかと。

彼はまたかかる位置になつてからも、人が自分を抛棄つては
 置いてくれぬのが、却つて迷惑で残念であつた。ハバトフは

おりおりびようき 折々病気の同僚を訪問するのは、自分の義務であるか
 のように、彼の所に蒼蠅く来る。彼はハバトフが嫌でならぬ。そ
 の満足な顔、人を見下るような様子、彼を呼んで同僚と云
 う言、深い長靴、此等は皆気障でならなかつたが、殊に癩に障
 るのは、彼を治療することを自分の務として、真面目に治療
 をしている意なの。で、ハバトフは訪問をする度に、きつと
 ブローミウム加里の入った壇と、大黃の丸薬とを持って来る。
 ミハイル、アウエリヤヌイチもやはり、しよつちゆう、アन्द
 レイ、エヒミチを訪問ねて来て、気晴をさせることが自分の義
 務と心得ている。で、来ると、まるで空々しい無理な元気を
 出して、強いて高笑をして見たり、今日は非常に顔色が

いいとか、何とか、ワルシヤワの借金を払わぬので、内心の苦しくあるのと、恥しくある所から、余計に強いて気を張つて、大声で笑い、高調子で饒舌るのであるが、彼の話にはもう倦厭りしているアンドレイ、エヒミチは、聞くのもなかなか大儀で、彼が来ると何時もくると顔と顔を壁に向けて、長椅子の上に横になつた切り、そうして歯を切つていたのであるが、それが段々度重なれば重る程、堪らなく、終には咽喉の辺りまでがむずむずして来るような感じがして来た。

(十六)

或日郵便局長ミハイル、アウエリヤヌイチは、中食後

にアンドレイ、エヒミチの所を訪問した。アンドレイ、エヒミ

チはやはり例の長椅子の上。すると丁度ハバトフもブローミウ

ム加里の壇を携えて遣つて来た。アンドレイ、エヒミチは重そう

に、辛そうに身を起して腰を掛け、長椅子の上に両手を突張る。

『いや今日は、おお君は今日は顔色が昨日よりもまたずツと

いいですよ。まず結構だ。』と、ミハイル、アウエリヤヌイチ

は挨拶する。

『もう全快してもいいでしょう。』とハバトフは欠をしながら

言を添える、

『平癒りますとも、そうしてもう百年も生きませあ。』と、郵

便局長は愉快気に云う。

『百年てそれも行かんでしようが、二十年やそこらは生き延びますよ。』ハバトフは慰め顔。『何んでもありませんさ、なあ同僚。悲観ももう大抵になさるがいいですぞ。』

『我々はまだ隠居するには早いです。ハハハそうでしょうドクトル、まだ隠居するのには。』郵便局長は云う。

『来年辺はカフカズへ出掛けようじゃありませんか、乗馬で以てからにあちこちを駆廻りましょう。そうしてカフカズから帰ったら、こんどは結婚の祝宴でも挙げるようになりましょう。』と片眼をパチパチして。『是非一つ君を結婚させよう……ねえ、結婚を。』

アンドレイ、エヒミチはむかつとして立上った。

『失敬な！』と、一言※ぶなりドクトルは窓の方に身を退け。

『全体貴方々はこんな失敬なことを言っていて、自分では

気が着かんのですか。』

柔かに言う意であつたが、意に反して荒々しく拳をも固めて

頭上に振翳した。

『余計な世話は焼かんでもいい。』ますます荒々しくなる。

『二人ながら帰つて下さい、さあ、出て行きなさい。』

自分の声では無い声で顫えながら※ぶ。

ミハイル、アウエリヤヌイチとハバトフとは呆氣に取られて瞠めていた。

『二人とも、さあ出てお行でなさい。さあ。』アンドレイ、エヒ
 ミチはまだ※び続けている。『鈍痴漢の、薄鈍な奴等、葉も
 へちま糸瓜もあるものか、馬鹿な、軽拳な！』ハバトフと郵便
 局長とは、この権幕に辟易して戸口の方に狼狽出て行
 く。ドクトルはその後を睨めていたが、ゆきなりブローミウム加
 里の壇を取るより早く、発矢とばかりそこに投付る、壇は微塵に
 粉碎してしまう。

『畜生！ 行け！ さっさと行け！』と彼は玄関まで駈出
 して、泣声を上げて怒鳴る。『畜生！』
 客等が立去つてからも、彼は一人でまだしばらく悪体を吻
 いている。しかし段々と落着くに随つて、さすがにミハイル、

アウエリヤヌイチに對しては氣の毒で、定めし恥入っていること
 だろうと思えば。ああ思慮、知識、解悟、哲学者の自若、そ
 れ將た安にか在ると、彼はひたすらに思うて、慙じて、自ら赤
 面する。

その夜は慙恨の情に駆られて、一睡だもせず、翌朝遂に意を
 決して、局長の所へと詫に出掛る。

『いやもう過去は忘れましょう。』と、ミハイル、アウエリヤヌ
 イチは固く彼の手を握つて云うた。『過去のことを思い出すもの
 は、両眼を抉つてしまひましょう。リュバフキン！』と、彼
 は大声で誰かを呼ぶ。郵便局の役員も、来合わしていた
 人々も、一斉に吃驚する。『椅子を持って来い。貴様は待つ

ておれ。』と、彼は格子越に書留の手紙を彼に差出している
 のうふ農婦に怒鳴り付ける。『俺の用のあるのが見えんのか。いや過去は
 おも思ひ出しますまい。』と彼は調子を一段と柔しくしてアンドレ
 イ、エヒミチに向つて云う。『さあ君、掛け給え、さあどうか。』
 一分間黙して両手で膝を擦っていた郵便局長はまた
 云出した。

『私は決して君に対して立腹は致さんので、病気なれば扱
 ころな無いのです、お察し申すですよ。昨日も君が逆上られた後、私
 はハバトフと長いこと、君のことを相談しましたがね、いや君
 もこんどは本気になって、病気の療治を遣り給わんといかん
 です。私は友人として何も彼も打明けます。』と、彼は更に続

けて。『全体君は不自由な生活をされているので、家と云え
 ば清潔でなし、君の世話をする者は無し、療治をするには銭
 は無し。ねえ君、で我々は切に君に勧めるのだ。どうぞ是非一
 つ聴いて頂きたい、と云うのは、実はそう云う訳であるから、寧
 君は病院に入られた方が得策であろうと考えたのです。ね
 え君、病院はまだ比較的、食物はよし、看護婦はいる、
 エウゲニイ、フェオドロイチもいる。それは勿論、これは我
 々だけの話だが、彼は余り尊敬をすべき人格の男では無い
 が、術に掛けてはまたなかなか侮られんと思う。で願くはだ、君、
 どうぞ一つ充分に彼を信じて、療治を専一にして頂きたい。
 彼も私にきつと君を引受けると云つていたよ。』

アンドレイ、エヒミチはこの切なる同情の言と、その上涙をさええ頬に滴らしている郵便局長の顔とを見て、酷く感動して徐に口を開いた。

『君は彼等を信じなざるな。嘘なのです。私の病氣と云うのはそもそもこういうのです。二十年來、私はこの町にいてただ一人の智者に遇つた。所がそれは狂人であると云う、これだけの事実です。で私も狂人にされてしまったのです。しかしなかに私はどうでもいいので、からしてつまり何にでも同意を致しましょう。』

『病院へお入りなさい、ねえ君。』

『左様、どうでもいいです、よしんば穴の中に入るのでも。』

『で、君は万事エウゲニイ、フェオドロイチの言に従うように、

ねえ君きみ、頼たのむから。』

『宜よろしい、私わたしは今いまは実じつ以もつて二にちも三さんちも行ゆかん輪わ索なに陥はま没まつてしまつたのです。もう万おし事まい休まい矣いです覚かく悟ごはしています。』

『いやきつと平癒なおるですよ。』

格子こうしの外そとには公こう衆しゆうが次第しだいに群むらつて来くる。アンドレイ、エヒ

ミチは、ミハイル、アウエリヤヌイチの公務こうむの邪魔じやまをするのを恐おそれて、話はなしはそれだけにして立たち上あがり、彼かれと別わかれて郵便局ゆうびんきょくを出でた。

丁度ちやうどその日ひの夕方ゆうがた、ドクトル、ハバトフは例れいの毛皮けがわの外がい套うに、深ふかい長靴ながくつ、昨日きのうは何事なにごとも無なかつたよかうな顔かおで、ア
ンドレイ、エヒミチをその宿やどに訪問たずねた。

『貴方に少々お願があつて出たのですが、どうぞ貴方は私と一つ立合診察をしては下さらんか、如何でしょう。』と、さり気なくハバトフは云う。

アンドレイ、エヒミチはハバトフが自分を散歩に誘つて気晴をさせようと云うのか、或はまた自分にそんな仕事を授けようと云う意なのかと考へて、とにかく服を着換へて共に通に出たのである。彼はハバトフが昨日のことは臆にも出さず、かつ氣にも掛けていぬような様子を見て、心中一方ならず感謝した。

こんな非文明的な人間から、かかる思遣りを受けようとは、全く意外であつたので。

『貴方の有仰る病人はどこなのです？、』アンドレイ、エ

ヒミチは問うた。

『病院です、もう疾うから貴方にも見て頂きたいと思つてい

ましたのですが……妙な病人なのです。』

やがて病院の庭に入り、本院を一週して瘋癲病

者の入れられたる別室に向つて行つた。ハバトフはその間何

故か黙したまま、さつさと六号室へ這入つて行つたが、ニキ

夕は例の通り雑具の塚の上から起上つて、彼等に礼をする。

『肺の方から来た病人なのですから。』とハバトフは小声で

云うた。『や、私は聴診器を忘れて来た、直ぐ取つて来ますか

ら、ちよつと貴方はここでお待ち下さい。』

と彼はアンドレイ、エヒミチをここに一人残して立去つた。

(十七)

日はすでに没した。イワン、デミトリチは顔を枕に埋めて寐台の上うえに横よこになつてゐる。中風患者ちゆうふうかんじやは何なにか悲かなしそうに静しずかに泣なきながら、唇くちびるを動うごかしてゐる。肥ふとつた農夫のうふと、郵便局員ゆうびんきよくいんとは眠ねむつていて、六号室ごうしつの内うちは閨げきとして静しずかであつた。

アンドレイ、エヒミチは、イワン、デミトリチの寐台ねだいの上うえに腰こしを掛かけて、大おお約よそ半時間はんじかんも待まつてゐると、室へやの戸とは開あいて、入はいつて来たきのはハバトフならぬ小使こづかいのニキタ。病院服びやういんふく、下着したぎ、上靴うわぐつなど、小腋こわきに抱かかえて。

『どうぞ閣下かつかこれをお召めし下ください。』と、ニキタは前院ぜんいん長の前に立たつて丁寧ていねいに云いうた。『あれが閣下かつかのお寢台ねだいで。』と、彼かれは更さらに新あらしく置おかれた寢台ねだいの方ほうを指さして。『何なんでもありませんです。かならずかならず直すぐに御全快ごぜんかいになられます。』

アンドレイ、エヒミチはここに至いたつて初はじめて読よめた。一言ごんも言いわずに彼かれはニキタの示しめした寢台ねだいに移うつり、ニキタが立たつて待まつているので、直すぐに着きていた服ふくをすツぽりと脱ぬぎ棄すて、病院びやういん服ふくに着きか換かえてしまった。シャツは長ながし、ズボン下したは短みじかし、上着うわぎは魚かなの焼やいた臭においがする。『きつと間まもなくお直なおりでしょう。』と、ニキタはまた云いうてアンドレイ、エヒミチの脱ぬぎ捨すてた服ふくを一ひと纏まとめにして、小腋こわきに抱かかえたまま、戸とを閉たてて行ゆく。

『どうでもいい……。』と、アンドレイ、エヒミチは体裁悪そうきまりわるに病院服びょういんふくのまえ前を搔合かきあわせて、さも囚しゅうじん人のようだと思おもいながら、『どうでもいいわ……燕尾服えんびふくだろうが、軍服ぐんぷくだろうが、この病院服びょういんふくだろうが、同じことだ。』

『しかし時計とけいはどうしたろう、それからポケットに入れて置おいた手帳てちようも、巻まきた蓑たばこも、や、ニキタはもう着物きものを悉のこらず皆持もつて行いつた。いや入いらん、もう死しぬまで、ズボンや、チョッキ、長ながく靴つには用ようが無ないのかも知しれん。しかし奇き妙みょうな成行なりゆきさ。』と、

アンドレイ、エヒミチは今いまもなおこの六号室ごうしつと、ベローワの家いえと何なんの異かわりも無ないと思おもうていたが、どう云いうものか、手足てあしは冷ひえて、顫ふるえてイワン、デミトリチが今いまにも起お起きて自じ分のこの姿すがたを見み

て、何とか思うだろうと恐（おそ）ろしいような気（き）もして、立（た）つたり、いた
 り、また立（た）つたり、歩（あ）いたり、ようやく半（はん）時（じ）間（かん）、一（じ）時（じ）間（かん）ばかり
 も坐（すわ）つていて見（み）たが、悲（かな）しい程（ほど）たいくつ屈（くつ）になつて来（き）て、どうしてこ
 んな処（ところ）に一（し）週（しゅう）間（かん）とい（い）られよう、ま（ま）して一（ねん）年（ねん）、二（ねん）年（ねん）など底（とうてい）
 辛（しん）棒（ぼう）をさ（さ）れるものと思（おも）い付（つ）いた。そう思（おも）えばま（ま）す居（い）
 堪（たま）らず、衝（つ）と立（た）つて隅（すみ）から隅（すみ）へと歩（あ）いて見（み）る。『そうしてからど
 うする、あ（あ）あ到（とう）ていい底（ち）居（い）堪（たま）らぬ、こ（こ）んな風（ふう）で一（し）生（しょう）！』
 彼（かれ）はど（ど）つかり坐（すわ）つた、横（よこ）にな（な）つたがま（ま）た起（お）き直（なお）る。そうして袖（そで）
 で額（ひたい）に流（なが）れる冷（ひや）汗（あせ）を拭（ふ）いたが顔（かお）中（ちゆう）焼（や）きざかな魚（なま）ぐさの腥（におい）
 して来（き）た。彼（かれ）はま（ま）た歩（あ）き出（だ）す。『何（なに）かの間（ま）違（まちが）いだ（だ）らう……話（わ）合（あ）
 っ（つ）て見（み）にや解（わか）らん、き（き）つと誤（ご）解（かい）が（が）あるの（の）だ。』

イワン、デミトリチはふと眼を覚し、脱然とした様子で両の拳を頬に突く。唾を吐く。初めちよつと彼には前院長に気が付かぬようであつたがやがてそれと見て、その寐惚顔には忽ち冷笑が浮んだので。

『ああ貴方もここへ入れられましたのですか。』と彼は噎れた声で片眼を細くして云うた。『いや結構、散々人の血をこうして吸つたから、こんどは御自分の吸われる番だ、結構々々。』
 『何かの多分間違です。』とアンドレイ、エヒミチは肩を縮めて云う。『間違に相違ないです。』

イワン、デミトリチはまたも床に唾を吐いて、横になり、そうして呟いた。『ええ、生甲斐の無い生活だ、如何にも残念な

ことだ、この苦痛くつうな生活せいかつがオペラにあるような、アポテオズで終おわるのではなく、これがああ死しで終おわるのだ。非人ひにんが来きて、死者ししやの手てや、足あしを捉とらえて穴あなの中なかに引込ひきこんでしまうのだ、うツふ！ だが何なんでもない……その換かわり俺おれは彼の世よから化ばけて来きて、ここらの奴や等つらを片かた端っぱしから嚇おどしてくれる、皆みんな白髪むらが折おりしもモイセイカは外そとから帰かえり来きたり、そこに前院ぜんいん長ちようのいるのを見みて、直すぐに手てを延のばし、

『一銭せんお呉くんなさい！』

(十八)

アンドレイ、エヒミチは窓の所に立つて外を眺むれば、日はも
うとツぷりと暮れ果てて、むこうの野広い畑は暗かつたが、左の
方の地平線上より、今しも冷たい金色の月が上る所、病
院の塀から百歩ばかりの処に、石の牆の繞らされた高い、白い
家が見える。これは監獄である。

『これが現実と云うものか。』アンドレイ、エヒミチは思わず
慄然とした。

凄然たる月、塀の上の釘、監獄、骨焼場の遠い焰、アン
ドレイ、エヒミチはさすがに薄気味悪い感に打たれて、しよんぼ
りと立っている。と直後に、吐とばかり溜息の声にする。
振返れば胸に光る徽章やら、勳章やらを下げた男が、二

ヤリとばかり片眼かためをパチパチと、自分じぶんを見て笑わらう。

アンドレイ、エヒミチは強しいて心こころを落おちつ着つけて、何なんの、月つきも、監か

獄ごくもそれがどうなのだ、壯健そうけんな者ものも勲章くんしょうを着つけているで

はないか。と、そう思返おもいかえしたものの、やはり失望しつぼうは彼かれの心

にいよいよ募つつて、彼かれは思おもわず両りの手に格子こうしを捉とらえ、力ちから儘まかせ

に揺動ゆすぶつたが、堅固けんこな格子こうしはミチリとの音おともせぬ。

荒涼こうりようの気きに打うたれた彼かれは、何なにかなして心こころを紛まぎらさんと、イ

ワン、デミトリチの寢台ねだいの所ところに行いつて腰こしを掛かける。

『私わたくしはもう落胆がっかりしてしまいましたよ、君きみ。』と、彼かれは顫ふるえ声こゑ

して、冷汗ひやあせを拭ふきながら。『全まったく落胆がっかりしてしまいました。』

『では一つ哲学てつがくの議論ぎろんでもお遣やんなさい。』と、イワン、デミ

トリチは冷笑する。

『ああ絶体絶命……そうだ。何時か貴方は露西亞には哲学は無い、しかし誰も、彼も、丁斑魚でさえも哲学をすると有仰ったつけ。しかし丁斑魚が哲学をすればって、誰にも害は無いのでしよう。』アンドレイ、エヒミチはいかにも情無いと云うような声をして。『どうして君、そんなにいい気味だと云うような笑顔をされるのです。幾ら丁斑魚でも満足を得られんなら、哲学をせすにはおられんでしょう。いやしくも智慧ある、教育ある、自尊ある、自由を愛する、即ち神の像たる人間が。ただに医者として、辺鄙なる、蒙昧なる片田舎に一生、壇や、蛭や、芥子粉だのを弄っているより外に、何の為すこ

とも無いのでしようか、詐欺、愚鈍、卑劣漢、と一所になつて、

いやもう！』

『くだ
下らんことを貴方は零していなさる。医者がいやなら大臣に

でもなつたらいいでしょう。』

『いや、どこへ行くのも、何を遣るのも望まんです。考えれば意
気が無いものさ。これまでは虚心平気で、健全に論じてい

たが、一朝生活の逆流に触るるや、直に気は挫けて落胆に

沈んでしまった……意気が無い……人間は意気が無いもの

です、貴方とてもやはりそうでしょう、貴方などは、才智は勝れ、

高潔ではあり、母の乳と共に高尚な感情を吸込まれた

方ですが、実際の生活に入るや否、直に疲れて病気になる

てしまわれたです。実に人は微弱なものだ。』

彼には悲愴の感の外に、まだ一種の心細き感じが、殊に日暮よりかけて、しんみりと身に泌みて覚えた。これは麦酒と、苧とが、欲しいのであったと彼も終に心着く。

『私はここから出て行きますよ、君。』と、彼はイワン、デミトリチにこう云うた。『ここへ灯を持つて来るように言付けますから……どうしてこんな真暗な所にいられますよう……我慢し切れません。』

アンドレイ、エヒミチは戸口の所に進んで、戸を開けた。するとニキタが躍上て来て、その前に立塞る。

『どちらへ！ いけません、いけません！』と、彼は※ぶ。『も

う眠る時ですぞ！』

『いやちと庭を歩いて来るのだ。』と、アンドレイ、エヒミチは
おどおど
怖々する。

『いけません、いけません！ そんなことをさせてもいいとは誰
からも言付かりません。御存じでしょう。』

云うなりニキタは戸をぱたり。そうして背を閉めた戸に当てて
やはりそこに仁王立。

『しかし俺が出たってそれが為に誰が何と云う。』アンドレイ、
エヒミチは肩を縮る。『訳が分らん、おいニキタ俺は出なければ
ならんのだ！』彼の声は顫える。『用があるのだ！』

『規律を乱すことは出来ません、いけません！』とニキタは諭す

ような調子。ちようし

『何だなんと畜生ちくしよう！』と、この時ときイワン、デミトリチは急きゆうにむツ

くりと起おきあが上る。『何なんで彼奴きやつが出ださんと云いう法ほうがある、我われわれ々を

ここに閉込とじこめて置おく訳わけは無ない。法ほう律りつに照てらしても明あきら白らかだ、何なに

人といえどもと雖さいばん、裁判さいばんもなくして無暗むやみに人ひとの自由じゆうを奪うばうことが出来できる

ものか！ 不埒ふらちだ！ 压制あつせいだ！』

『勿論もちろん不埒ふらちですとも。』アンドレイ、エヒミチはイワン、デミ

トリチの加勢かせいにとみに力ちからを得えて、気きが強つよくなり。『俺おれは用ようがある

のだ！ 出でるのだ！ 貴様きさまに何なんの権利けんりがある！ 出だせと云いつたら

出だせ！』

『解わかつたか馬鹿野郎ばかやろう！』と、イワン、デミトリチは※さけんで、拳こぶしを

固めて戸を敲く。『やい開ける！ 開ける！ 開けんか！ 開け

んなら戸を打破すぞ！ 人非人！ 野獣！』

『開ける！』アンドレイ、エヒミチは全身をぶるぶると顫わして。『俺が命ずるのだッ！』

『もう一度言つて見ろ！』戸のむこうでニキタの声。『もう一度言つて見ろ！』

『じゃ、エウゲニイ、フェオドロイチでもここへ呼んで来い、ちよつと俺が来てくれつて云つているとそう云え……ちよつとでいいからッて！』

『明日になればお出でになります。』

『何日になつたつて我々を決して出すものか。』イワン、デミ

トリチは云う、『我々をここで腐らしてしまう料簡だろう！ 来世に地獄がなくて為るものか、こんな人非人共がどうして許される、そんなことで正義はどこにある、えい、開ける、畜生！』彼は噎れた声を絞って、戸に身を投掛け。『いいか、貴様の頭を敲き破るぞ！ 人殺奴！』

ニキタはぱツと戸を開けるより、阿修羅王の荒れたる如く、両手と膝でアンドレイ、エヒミチを突飛ばし、骨も砕けよとその鉄拳を真向に、健か彼の顔を敲き据えた。アンドレイ、エヒミチはアツと云ったまま、緑色の大浪が頭から打被さつたように感じて、寢台の上に引いて行かれたような心地。口の中には塩気を覚えた、大方齒からの出血であろう。彼は泳が

んとするもののように両手を動かして、誰やらの寢台にようよう取とりすが続つつた。とまたもこの時振ときふり下おろしたニキタの第二の鉄拳てつけん、背骨せぼねも歪ゆがむかと悶もだゆる暇ひまもなく打うちつづいて、またまた三度目の鉄拳てつけん。イワン、デミトリチはこの時高ときたかく※声さけびごゑ。彼も打ぶたれたのである。

それよりは室しつ内ないまた音おともなく、ひツそりと静しずり返かえつた。折おりかあわあわら淡あわあわ々あわしい月の光つきひかり、鉄窓てつそうを洩もれて、床ゆかの上に網うなに似にあたる如ごときすみえすみえゆめ墨画すみえを夢ゆめのように浮出うきだしたのは、謂いうようなく、凄せい絶ぜつまた惨さん絶ぜつの極きわであつた、アンドレイ、エヒミチは横よこたわつたまま、まだ息いきを殺ころして、身みを縮ちぢめて、もう一度打どたれはせぬかと待まち構かまえていいる。と、忽たちまち覚おぼゆる胸むねの苦痛くつう、腸ちようの疼痛とうつう、誰たれか鋭すき鎌かまを以もつて、

剗るにはあらぬかと思わるる程、彼は枕に強攪み着き、きりりと
 齒をば切る。今ぞ初めて彼は知る。その有耶無耶になつた脳裡に、
 なお朧朦氣に見た、月の光に輝し出されたる、黒い影のようなこ
 の室の人々こそ、何年と云うことは無く、かかる憂目に遭わ
 されつつありしかと、堪え難き恐しさは電の如く心の中に閃き渡
 つて、二十有余年の間、どうして自分はこれを知らざりしか、
 知らんとはせざりしか。と空恐しく思うのであつたが、また剛
 情我慢なるその良心は、とは云え自らはいまだかつて疼
 痛の考えにだにも知らぬのであつた、しからば自分が悪いので
 は無いのであると嘯いて、さながら襟下から冷水を浴びせられ
 たように感じた。彼は起上つて声限りに※び、そうしてここ

より拔出ぬけいでて、ニキタを真先まつさきに、ハバトフ、會計かいけい、代診だいしんを
 塵みなごろし殺ころにして、自分じぶんも続いて自殺じさつして終しまおうと思おもうた。が、ど
 うしたのか声こえは咽喉のどから出いでず、足あしもまた意いの如ごとく動うごかぬ、息いきさ
 え塞つまつてしまいそうに覚おぼゆる甲斐かいなさ。彼かれは苦くるしさに胸むねの辺あたりを搔か
 きむし筆むしり、病院服びょういんふくも、シャツも、ぴりぴりと引裂ひきさくのであつた
 が、やがてそのまま氣絶きぜつして寢台ねだいの上うえに倒たおれてしまつた。

(十九)

よくちよかれ
 翌朝あした彼は激はげしき頭痛づつうを覚おぼえて、両耳りょうみみは鳴なり、全身ぜんしんには只ただ
 ならぬ悩なやみかんを感じかんじた。そうして昨日きのうの身みに受うけた出来事できごとを思おもい出だし

でも、^{はずか}恥しくも何とも感^{かん}ぜぬ。昨日^{きのう}の小胆^{しょうたん}であつたことも、^{つき}月さえも気味悪く見たことも、以前^{いぜん}には思^{おも}ひもしなかつた感^{かんじよ}情^うや、思^し想^{そう}を有^{あり}のままに吐露^{とろ}したこと、即^{すなわ}ち哲^{てつ}学^{がく}をしてい^るめ^めだ^だか^かの不^ふ満^{まん}足^{ぞく}のことを云^いうたことなども、今^{いま}は彼^{かれ}に取^とつて何^{なん}でもなかつた。

彼^{かれ}は食^くわず、飲^のまず、動^{うご}きもせず、横^{よこ}になつて黙^{もく}していた。

『ああもう何^{なに}も彼^{かれ}もない、誰^{たれ}にも返^{へん}答^{とう}などするものか……もうどうでもいい。』と、彼^{かれ}は考^{かんが}えていた。

中^{ちゆう}食^{じきぎん}後^ごミハイル、アウエリヤヌイチは茶^{ちや}を四^{はん}半^{はん}斤^{ぎん}と、マルメラドを一^{きん}斤^も持^も参^まつて、彼^{かれ}の所^{ところ}に見^み舞^{まい}に來^きた。続^{つづ}いてダリユシカも來^き、何^{なん}とも云^いえぬ悲^{かな}しそうな顔^{かお}をして、一^{じかん}時^じ間^{かん}も旦^{だん}那^なの寐^ね台^{だい}の

傍そばにじつと立たたつままで、それからハバトフもブローミウム加里カリの
 塚びんを持つて、やはり見舞みまいに來たのである。そうして室内しつないに何なにか
 香こうを薰くゆらすようにとニキタに命めいじて立去たちさつた。

その夕方ゆうがた、俄然がぜんアンドレイ、エヒミチは腦充のうじゆうけつ血おこを起おこして
 死去しきよしてしまつた。初めはじ彼は寒氣さむけを身みに覺おぼえ、吐氣はきけを催もよおして、異
 様ような心地悪こころちあしさが指先ゆびさきにまで染渡しみわたると、何か胃いから頭あたまに突上つきあ
 げて來くる、そうして眼めや耳みみに掩おおい被かぶさるような氣きがする。青い光あおひかり
 が眼めに閃付ちらつく。彼かれは今いますでにその身みの死期しきに迫せまつたのを知しつて、
 イワン、デミトリチや、ミハイル、アウエリヤヌイチや、また多お
 数おほくの人の靈魂れいこん不死ふしを信しんじているのを思おもい出だし、もしそんなことが
 あつたらばと考かんがえたが、靈魂れいこんの不死ふしは、何なにやら彼かれには望のぞましく

なかつた。そうしてその考えはただ一瞬間にして消えた。昨日読んだ書中の美しい鹿の群が、自分の側を通つて行つたように彼には見えた。こんどは農婦が手に書留の郵便を持って、それを自分に突出した。何かミハイル、アウエリヤヌイチが云うたのであるが、直に皆搔消えてしまった。かくてアンドレイ、エヒミチは永劫覚めぬ眠には就いた。

下男共は来て、彼の手足を捉り、小聖堂に運び去つたが、彼が眼いまだ瞑せずして、死骸は台の上に横臥っている。夜に入つて月は影暗く彼を輝した。翌朝セルゲイ、セルゲイチはここに来て、熱心に十字架に向つて祈禱を捧げ、自分等が前の院長たりし人の眼を合わせたのであつた。

一日いちにちを経て、アンドレイ、エヒミチは埋まい葬そうされた。その祈きとう式しきに預あずかったのは、ただミハイル、アウエリヤヌイチと、ダリユシカとで。

青空文庫情報

底本：「明治文學全集 82 明治女流文學集（二）」筑摩書房

1965（昭和40）年12月10日発行

1989（平成元）年2月20日初版第5刷発行

底本の親本：「露国文豪 チエホフ傑作集」獅子吼書房

1908（明治41）年10月

初出：「文藝界」

1906（明治39）年4月

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

「此の」は「この」、「又」は「また」、「於て」は「おいて」、
「毎も」は「いつも」、「何処」は「どこ」、「慙う」は「こう
」、
「其」は「その」または「それ」、「是」は「これ」または
「ここ」、「丈」は「だけ」、「計り」は「ばかり」、「凝と」
は「じつと」、「為た」は「した」、「些し」は「すこし」、
「為て」は「して」、「然し」は「しかし」、「猶且」は「やは
り」、
「其れ」は「それ」、「事」は「こと」、「左に右」は
「とにかく」、「儘」は「まま」、「而して」は「そうして」、
「了う」は「しまう」、「呉れ」は「くれ」、「悉皆」は「すつ
かり」、
「有った」は「あつた」、「慙く」は「かく」、「唯」
は「ただ」、
「可い」は「いい」または「よい」、
「有つて」は

「あつて」または「もつて」、「先ず」は「まず」、「施て」は「やがて」、「然るに」は「しかるに」、「此度」は「こんど」、「亦」は「また」、「了つた」は「しまつた」、「此」は「ここ」または「かく」、「初中終」は「しよつちゆう」、「往々」は「まゝ」、「居る」は「いる」または「おる」、「是等」は「これら」、「為なければ」は「しなければ」、「杯」は「など」、「儲」は「さて」、「有る」は「ある」、「屡※」[#二の字点、1-2-22]は「しばしば」、「縦令」は「よし」または「たとい」または「よしんば」、「屹度」は「きつと」、「奈何」は「どう」または「いかん」または「いか」、「不好」は「いや」、「為ぬ」は「せぬ」、「有り」は「あり」、「抑も」は「そもそも」、

「有たぬ」は「もたぬ」、「這麼」は「こんな」、「此れ」は
 「これ」、「若し」は「もし」、「那樣」は「そんな」、「愈々」
 は「いよいよ」、「全然」は「すっかり」または「まるきり」ま
 たは「まるで」、「猶」は「なお」、「密と」は「そつと」、
 「那麼」は「あんな」または「こんな」、「乃」は「そこで」、
 「然」は「そう」または「しかし」、「未だ」は「まだ」または
 「いまだ」、「然う」は「そう」、※「#」ウ「夕」、第3水
 準1-14-76] 卒」は「いきなり」、「有ゆる」は「あらゆる」、
 「些と」は「ちよつと」、「恰で」は「まるで」、「丈け」は
 「だけ」、「迄」は「まで」、「宛然」は「まるで」または「さ
 ながら」、「猶更」は「なおさら」、「為ねば」は「せねば」、

「恠る」は「かかる」、「且つ」は「かつ」、「只管」は「ひたすら」、
「茲」は「ここ」、
「若」は「もし」、
「切て」は「せめて」、
「可く」は「よく」、
「好く」は「よく」、
「全然で」は「まるで」、
「此所」は「ここ」、
「度い」は「たい」、
「毎」は「いつも」、
「為よう」は「しよう」、
「好い」は「いい」、
「または」は「よい」、
「已」は「すで」、
「依然」は「やはり」、
「尤も」は「もつとも」、
「如何」は「どう」、
「而て」は「して」、
「然れども」は「けれども」、
「唯だ」は「ただ」、
「此方」は「このかた」、
「度く」は「たく」、
「嘗つて」は「かつて」、
「其処」は「そこら」、
「または」は「そこ」、
「此処」は「ここ」、
「居つて」は「おつて」、
「甚麼」は「どんな」、
「可かろう」

は「よかろう」、「居らん」は「おらん」、「畢竟」は「つまり」、「可けません」は「いけません」、「最と」は「いと」、「仮令」は「たとい」、「之れ」は「これ」、「嘗て」は「かつて」、「何卒」は「どうぞ」または「どうか」、「仕よう」は「しよう」、「何方」は「どちら」、「居り」は「おり」、「為ない」は「しない」、「然らば」は「しからば」、「抑」は「そもそも」、「那」は「あれ」または「ああ」、「益※」[#二の字点、1-2-22]は「ますます」、「有つ」は「もつ」、「仕て」は「して」、「仕ない」は「しない」、「丁と」は「ちゃんと」、「左右」は「とかく」、「居らぬ」は「おらぬ」、「未」は「いまだ」、「少時」は「すこし」または「しばし」または「しばらく

く、「匆卒」は「いきなり」または「ゆきなり」、「暫」は
 「やや」、「然り」は「さり」、「態々」は「わざわざ」、「沁
 々」は「しみじみ」、「左様」は「そう」、「夫れ」は「それ」、
 「為ず」は「せず」、「其辺」は「そこら」、「彼方此方」は
 「あちこち」、「有繫」は「さすが」、「可かん」は「いかん」、
 「好し」は「よし」、「度」は「たい」、「復」は「また」、
 「計」は「ばかり」、「況して」は「まして」、「苟も」は「い
 やしくも」、「那方」は「むこう」、「些と」は「ちと」、「頓
 に」は「とみに」、「那裏」は「むこう」に、置き換えました。
 ※※「#」ノ十臣十頁」は、「頤」に書き換えました。
 ※※「#」抜」の「友」に代えて「ノ／友」は「抜」に書

き換えました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※「理窟」と「理屈」、「踏」と「蹈」、「匆」と「※」「#」「夕」、第3水準「1-14-76」の混在は底本通りです。

※仮名表記と繰り返し返り記号の使い方の揺れは、底本通りです。

入力：阿部哲也

校正：米田

2011年1月20日作成

2011年3月6日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

六号室

アントン・チエホフ Anton Chekhov

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 瀬沼夏葉訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>